法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-10

蘭医森田千庵伝研究

片桐, 一男 / KATAGIRI, Kazuo

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
14
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
90
(発行年 / Year)
1961-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010664

Hosei University Repository

蘭医森田千庵伝研究

片桐一男

はしがき

越後の蘭医森田千庵については、知られるところ少なく、その関係資料の所在すらも十分ではなかった(1)。

筆者は先年来千庵関係資料の採訪を続けてきたが、このほど現存資料の全てに接することができた。それらは一、新潟大学医学部図書館所蔵資料（未整理につき蒲原宏氏保管中）、二、小柳鉄次氏所蔵資料（千庵旁系に当る新潟県加茂市）、三、山吉卓爾氏所蔵資料（千庵旁系に当る東京都足立区）、四、国立国会図書館支部静嘉堂文庫（旧大槻文庫本）の四ヶ所にある資料である。それぞれの資料については後に資料目録で示す。

本論の目的は、これらの資料を得て、第一に森田千庵を正しく知ること。第二、千庵に蘭学史上注目すべき功業のあること。第三、千庵を繞る化政期の京都・江戸の蘭学者群を知ること。第四蘭学修業者の経済事情の一班を知ること。にある。

出身

森田千庵は寛政十年（一七九八）十月二三日、甫三、のぶの二男として越後国蒲原郡加茂町（現在新潟県加茂市）に生まれ、名を徳盛（のりもり）、字を守古（もりひさ）、謙斎・巣守園・榧々舎・雲樵などと号し、千庵は通称にして晩年に至り逸庵とも称した。歿年は安政四年（一八五七）十二月二二日年六十歳である。山吉家系図（写）(1)によれば、先祖は平氏の出にして池氏を名乗り三条の城主であった。森田氏を名乗るのは景明（慶長十三年生寛文二年七月五日歿）の代からである。医を業としはじめたのは二代後の栄盛（越庵と称し、承応三年生享保十一年午四月二十八日病死年七十三）の延宝年中より加茂町に移住し、開業してからである。千庵の父甫三は明和四年七月十三日生れ文政十一

Hosei University Repository

年九月十四日六十二歳で歿し、諱を立、幼名を玄順、後甫三と改め、字を君柔・楽山堂・静斎と号した。十八歳の時、笈を負うて江戸に上り、御本丸奥医師岡甫庵に学ぶこと六年、帰って父のあとを継いで医を業とした人である。また甫三は本草に造詣が深く、病理・薬剤の研鑽に努め、難病には師の岡甫庵の意見をただし、また親交のあった京都の蘭医藤林普山に患者の症状を書き送って西洋医学から見た治療の教示を求めたことも度々あった。実際普山は「白根町一婦人年四十余者誠ニ奇症御治療追々快方条感心仕候」といい、「上条一児年四歳者鳥渡難治之様被存候御事成仁其病半を減するもの奇と謂べし全く公之妙手に出御事に候」と甫三の治療手腕をほめている。この名声をききつたいた遠近の病人が続々と治療を乞いに集ったのであった。

森田千庵はこのような名声ある医家に生を享けた。千庵は十四歳の時父の許を得て医学勉強のため江戸へ上った。最初は岡寿庵の門に入ったものと思われる。確かなことはわからない。暫く家にあって家業を手伝っていたが、彼の向学心は遂に父を説いて、父甫三と親交のあった京都の蘭医藤林普山に入門することになった。

京都遊学

文政三年（一八二〇）五月六日附藤林普山より甫三宛

尺牘(2)

以寸楮得貴意候、先以向暑之節に候所御満堂御揃御安健に被成御座奉賀候然者御地真木屋定二郎殿先日来治療致申候所下向に付方書致呉候様被申候に付方薬致し進申候

方　六物附子湯に御座候然所ッケ薬は製法面倒に付貴家に御存候間貴家ゟ御貰ひ被申候様申入置候乍御面倒御頼申上候定て御存じに候事と存候へ共又々認上候

白芥子末大　番桝末中　樟脳少

右焼酒に浸す事二三日漉し滓を去り其焼酒を塗る、右病症手指不自由にて品によく候へば寒脱疽に相成候事も難斗察居申候

一、御令息最速出府候哉如何承度奉存候未出府も無御座候はば乍憚宜敷頼上候

一、佐州より松永子書状被下忝奉存御報も不申御無沙汰に打過居申候御序之刻急度奉頼候

一、此節は御病用多と奉存候奇病御座候はば承度奉存候為彦儀も無事に御座候共右御願上方々草々如此候

不具謹言

五月六日　　藤林泰介(2)

森田甫三様　貴下

尚々暑気之節随分御自愛専一に奉祈候将尊家御令閨様

Hosei University Repository

へも宜敷御伝可被下　　草々頓首

この尺牘によれば、甫三と普山は可成以前からの知己であったらしく、特に千庵の藤林普山門への遊学に関して普山から父甫三宛に出京を督促している。

文政四年（一八二一）四月八日附千庵より父甫三宛尺牘（掛紙）

森田甫三様　　同　仙庵

用書　　京都六条ゟ

一筆啓上候向暑ニ御座候へ共御家内御堅勝可被成御座奉存候野生無事罷有申候然者三人共随分達者ニ而当月八日ニ京着仕未逗留仕居申候去ながら北国ハ無残所見物仕京都も随分不残見物仕候積りニ相談仕居申候

一、買物之義も大方調申候乍去大門屋高値ニ而調兼申候呉服物ハ陸持仕三条中川へ相出申候間届き次第取可被遣候中道具大廻二舟に積み候間伴左衛門殿へ上り可申候

一、如来様御頼申上候間左様思召可被下候

一、私足甚疼難義仕候間火御あらため可被下候乍慮外下へも宜敷御心得可被下候内皆々之者へも能々御心得可被下候随分火盗用心御心付可被下候家来共へも其段能々御申付可被下候御序之節諏訪、沓塚之内其外谷幷に万右衛門新右衛門甚助喜助勇助親類森右衛門方へも宜敷御心得可被下候猶後便に可申遣候以上

四月十六日

尚々呉服物相届き申候へば早速封印改其品数道中そんじ御改御受取可被下候呉服品数箱之内へ書付入置申候間左様に思召可被下候開封改候節寝間之薄縁之内ニ而御改見可被下以上　尚々京都両人六〆百五十文位米両ニ壱石位之事ニ御座候麦は上作と申事ニ候以上

この尺牘から、千庵は文政四年（一八二一）四月八日に京都に着き、十六日にはこまごまと父甫三宛に書翰を寄せているのである。この藤林普山門遊学に際し、旅中の小遣い帳ともいうべき覚があるから次に紹介する。

覚

一、弐両壱分弐朱也　道中四十二日分宿払小遣入用
一、壱分也　津嶋祈祷代
一、壱分也　伊勢御師代
一、壱分也　大坂赤下手斎外科道具代
一、壱分也　姫路ニ而大小のをつかけ引肌
一、弐朱也　柳合利　壱ツ
一、弐朱也　半紙筆並に小遣共
一、九匁也　和蘭薬鏡(4)代　是は先生江上る
一、十匁五分　五篇　壱冊
一、壱匁三分　京都人物志　一冊

Hosei University Repository

一、三匁　阿んどう　一ツ
一、弐朱也　枕一ツ　両傘一ツ　小遣共ニ
一、十二匁　語法解(5)　三冊也　下駄壱足
一、弐朱也　筆七本　小遣共に
一、弐朱也　半切紙百枚半紙壱束たばこ小遣
〆
一、金四両弐朱　蘭書　二部
一、三分弐朱　訳鍵(6)一部
一、四匁　烟草　二斤
一、四匁　烟管　一ツ
一、十五匁　五液診法(7)　外科則
一、壱分　大小下緒一組
一、弐朱　あみじばん　男三ツ櫛　油元結
小遣共に　壱分
〆大円　彼是　十両弐朱斗也
外に　三分弐朱カテーテル(8)　一本
一、廿八匁　縮青梅　単物　壱枚
一、六匁　雪駄
一、四拾八匁　団蒲　二ツ　紫、紹、色、上り
一、弐朱也　入塾之砌　酒肴代也
一、七百文　三日半　滞留代
〆此処ハ先ツ壱両弐分　内済致ス
外ニ洗物仕立物等も有之
〆是ハ平野屋太助方之分也
右之通リハ是迄買物仕候分大円ニ御座候猶壱弐分ハ付落も有之可申奉存候尚着物ハ袷羽織壱枚単物宜所壱枚幷に侶の羽織壱枚是ヲ求メ申度候余り衣装見具るしく候而者先生の代脈に罷出候時先生の外分にも相成り申候誠に京都ハ衣装の美なる処故大きに困り申候外ニ先生江寄塾料幷に当年差当り入用之書物等求メ小遣など勘定仕候へば今十両も無之候而ハ来三月迄に不足ニ御座候
一、内科撰用(9)　是ハ一両日中に求メ申候間左様思召被下度候、代四拾五匁斗り
一、ハルマ(10)　壱寸五分位の重ニ而写本十二冊
若売物にても有之候へは求メ申度書代金弐両弐分斗
一、三部の内科
写させ候ても三部ニ而紙数二千五百枚斗り　三両斗の分也
一、海上の八譜(11)　三十巻斗り
〆是ハ是悲帰国迄に無之候而ハ不行届ニ候外ニ飜訳之書幷に蘭書先日申上候通り
〆右之品ハ追々見合せ帰国迄に持参仕度候間右之段御願申上候　猶々後便之時万々可申上候　恐惶謹言

Hosei University Repository

己六月廿二日　　森田儛菴

父上様

右は前述の通り文政四年（一八二一）千庵二四才の時に当り、註の項で指摘詳述した如く蘭学史研究上頗る興味深く、価値ある史料である。

文政四年（一八二一）九月廿一日付普山より甫三宛尺牘

貴墨辱拝読仕候時下秋冷之所御家内御揃御多祥に被成御座賀候随て小子方皆々無異に消光仕候間乍憚貴意易思召可被下候、陳者今般サイキ之根御差送被下辱仕合に奉存候、御面倒之段恐入申候兼而和名書に信州方言サイキは白芷なりと申事御座候によりて幸ひ今般気味監定仕候処弥白芷に御座候、和蘭にては専風邪に用ひ御座候御試用可被下候

功能

心胃を強壮にし頭部の諸疾を療し鬱閉を開き汗を発し一切損傷を愈し中毒を解し疫熱久瘧を治し狂犬咬傷青腿牙疳を療す以上レメレイ本草

一御令息様も随分気丈其上追々出精彼横文字も余程読出申候御安心可被下候

一小柳家来十日道中にて帰国之条誠に速なる事驚入申候御出会之節乍憚小柳幷同人へ宜敷御伝可被下候

一御面倒恐入候へ共カタクリ之根全きもの一個御恵み被下候様奉願上候

一薬種場之儀御申送之条一々承知仕早速参殿役人迄申入候処其儀は余程六ヶ敷候由に御座候併しとく〳〵相考可申との事に御座候何れヶ様之儀は江戸表迄御引合入候様ニ承候先は右貴答迄　草々如此御座候　頓首

九月廿一日　　藤林泰介

森田甫三様　貴酬

尚々追々冷気御自愛専一に奉祈候毎々家内へ御加筆被下辱奉存候同人も宜敷御礼申上候様申出候、乍末筆御令閨様にも宜敷御伝可被下候松栄子玄張佐渡表へ渡海帰国之由珍重無事に御座候哉、承度存候、宜敷御頼御声可被下候草々　頓首

上洛半歳、千庵は藤林塾において蘭語の訳読も余程進歩したらしい。

文政五年（一八二二）三月四日附普山より甫三宛尺牘

正月晦日御認之貴墨相達辱拝見仕候、時下春色相催候所弥御平安に被成御起居珍重不斜奉存候、次ニ当無異ニ眠食仕候間乍憚貴意易思召可被下候、陳者御令郎も随分気丈にて御出精候間御安心可被成候、当春は和蘭人も来貢に付御令郎バタビア局方と申もの手に入申候尤も新書にて面白存候、其他彼此蘭書も手に入られ追々御勤ニ候間拙者も悦入申候

Hosei University Repository

一白根町一婦人年四十余者誠に奇症御治療追々快方条感心仕候御事ニ御座候御治療之他別条無之に爪甲之辺皸裂甚によれば万一緑礬を用ひ候症にては無御座候哉

一上条一児年四歳者鳥渡難治之様被存候御事成に其病半を減するもの奇と謂べし全く公之妙手に出御事に候

一臼井村一男年二十余者病用若酸液或寒気のために血液の循環を支障して壅塞をなすものならんか

治法

生刺絡　一、二度

煎湯　御方中にワサビ白芥子加味

丸薬御主方通りに緑礬加味

右如何存候、最早此節は効之有無御分も有之候半と存候又々御序に承度奉存候

一加州金沢一男子年二十四五歳婁瘻癧十四五於茲時々眩暈精神不了々去歳父乗車来京請治数医服薬頗許多無寸効故仲冬延余令診之寸口脈洪大蹠陽沈小有血液上行盛下行衰之状投之以異防通湯、外敷白芥酒一月許、始得少歩漸而能歩往来十丁許至今薬依回也

先は右乍延引貴答旁々早々如此御座候　恐々不具

三月四日　藤林泰介

森田甫三様貴答

尚々乍憚御家内様方へ宜敷御伝被下候様奉願上候草々頓首

文政五年六月十一日附千庵より父甫三宛尺牘

今度三条筆屋兵助帰国ニ付本簡啓上候時分柄厳暑之砌愈御揃御機嫌能被遊御座候重々目出度奉賀上候然者此度古金屋甚五兵衛殿ゟ承候紙包慥ニ落手仕候且又為替金も被成候ハんも是又難有奉存候将又拙者事も飜訳は先ツ文法語脈之大意を得局方位は心易く相分り候間一先つ帰国仕度ニ付古金屋同道ニ而帰郷可仕候間此段左様御思召被下度候右ニ付金子も二三両余斗相頼ミ可申候間此段御承知被下度候一太兵衛事も御尊書ニ而大ニ驚き申候乍併何れにも此地に於ても無致方候間何れ同道ニ而帰国仕候間此段左様御承知之程奉希上候書余ハ帰国候間拝尊顔万々可申上候恐惶謹言

六月十一日　森田徳盛

家厳君　玉案下

猶々此地発足ハ何れ六月廿四五日頃と奉存候乍恐御序之砌市川之皆々様江万々宜被仰上被下度候早々以上

一中山貫之介子江も宜御伝声之程奉希上候御上セ候品々其中吟味仕可申候間此段御申聞被下度候帰国前混雑早々申残候早々以上

一カテーテル細工之義何れ覚束なく奉存候へ共此地にて如何共可仕候間此段左様御思召被下度候早々以上

Hosei University Repository

六月十一日夜

前の文政五年三月四日付の書簡によれば、同年春千庵は「バタビア局方」その他蘭書を手に入れている。

局方とは蘭語で Apotheek ラテン語で Pharmacopoea といわれ、薬物の品質を基準する公定書である。

オランダで薬局方が国定となったのは一八五一（嘉永四）年でそれ以前は都市薬局方であった。すなわち江戸末期蘭方隆盛時代に我が蘭医家達が飜訳をしたのは都市薬局方の方で、戻鄧（ライデン）薬局方四版（一七七〇）、亜謨斯的爾（アムステル）達謨（ダム）薬局方二版（一七九二）、抜太亜肸（バタビア）亜薬局方（一八〇五）、和蘭（オランダ）薬局方（一八二六・一八四〇）の何れかを訳したものである。この外竜動（ロンドン）局方、画墨（パーメル）児局方、越電（エデンビュルク）勃爾孤（ネデルランド）局方、涅垤児蘭土局方といったものもある。

この薬局方について、早く大槻玄沢は天明元年（一七八一）「六物新志」の中で「和蘭局方是レ乃チ薬局方中所ロノ用ユル之諸方ノ之書也」と説明し、天明三年（一七八三）「蘭学階梯」の「書籍」の項で「アポテーキ」を説明して「薬局方法修製及ヒ主治ヲ集タル書」といっている。藤林普山の「西医今日方」（弘化四年一八四七）の引用書目の説明によれば「薬物製煉集成書」となっている。

飜って、江戸時代の蘭方臨牀医書中には、何らかの形で薬物書が添付されている。例えば、広川獬の「蘭療方」には「蘭療薬解」が、吉雄南皐の「和蘭内外要方」には「内外要方附録和蘭薬剤譜」が、江馬春齢元弘の「和蘭医方纂要」にはその「附録」が、緒方洪庵の「扶氏経験遺訓」には「薬方篇」及び「附録」が、杉田立卿の「眼科全書」には「附録」が、といった具合である。その添付した目的は本文中の薬物を詳説するということと共に蘭方医家に薬物知識を汎く身につけさせようとしている。事実、宇田川槐園は「遠西医方名物考」（文政五年一八二二）の中で数種の「和蘭局方」を引用書として挙げ、よく利用している。また蘭学塾でも塾生に薬物知識を豊富ならしめんがため「和蘭局方」が利用されたことであろう。また幕末にいたれば医学の面だけでなく砲術につきものの火薬を製造する面にも応用され、中井剛屏の「砲薬新書」（安政二年）なども目にとまる。であるから「和蘭局方」の飜訳も行われ、原書を注文し、所持するものもかなりあったと思われる。管見のものを挙げてみるならば、蕃書調書の蔵本中にも De Pharmacopoea Nederlandica en Pharmacopoea Belgica onderling vergeleken. Nijmegen, 1853, 47 p. 23×14 cm「長崎東衙官許」印を捺すものが六点もみえ(13)、また一八三二（天保二）年には通詞の Takizairo なる者が Apotheek Nederlandsch 一冊を発注し(14)、同年他の通詞がやはり Nederlandsch

Hosei University Repository

Apotheek 一冊を発注している。一八三三年には Rente Meester の Takaki Eytaro が一冊、一八三九年には Opper Burger Meester の Takaki Syemon が一冊発注している(15)。現物のある所では、金沢大学医学部図書館の松雲公蒐集蘭書中には Nederlandsch Apotheek. 's Gravenhage 1851. xxii, 557p, xvi, xxiv, ii 23.5×14 cm 蔵書印「金沢藩医学校」を捺したものがある(16)。

「和蘭局方」の飜訳としては、(1)桐園先生閲、穂亭主人輯「西洋学家訳述目録」（嘉永五年（一八五二年）中に中川淳庵の著書として『和蘭局方写 同薬譜写…』の書名がみえる。杉田玄白の「蘭学事始」に「（淳庵）和蘭局方を訳し掛りしに業を卒へず、天明の初年（一七八六年）膈症を患て千古の人となれり」とあって、淳庵の「和蘭局方」は生前に完成しなかったことが知られるが、西島正廸俊庵編録「磐水先生著述書目」の「与二校正一訳説書」欄に『淳庵遺託和蘭局方　松延玄之続訳十巻』とあるから、淳庵遺稿は松延玄之が託されて続訳し、それを大槻玄訳が訂正したことがわかる。しかし、淳庵訳「和蘭局方」及び「同薬譜」の現存の有無は明らかでない。(2)「西洋学家訳述目録」に江馬槐園（蘭斎の義弟、京都に住み本量は内科）訳の『和蘭局方写二』があるが不詳。(3)宇田川槐園（玄随、宇田川家第五代）の訳と思われるもので、「明和□年新撰局方標目」一巻があり、宗田一氏は「明和七年（一七七〇）刊のライデン局方が原本であろう」と推定されている(17)。(4)宇田川榛斎（玄真、宇田川家第六代）訳「和蘭局方」八巻及び拾遺附録全三冊について宗田一氏はやはり原本はライデン薬局方（一七七〇）第四版を当てられ、全訳ではなく、製剤関係の部分のみの抄訳であると解説していられる(18)。ところで普山は千庵が入手したバタビア局方を「尤も新書にて面白存候」といっているが、事実それまでに訳されたライデン局方よりは数段内容が新しい。すなわち初版は一八〇五年刊で Bataafsche Apotheek(19)という。してみると初版が出てから一七年後の文政五年（一八二二）に森田千庵が購入し、京都の藤林普山の塾中で飜訳にかかったことを知るのであって、寡聞にして今日までバタビヤ局方の飜訳者についての報告を聞いていない。わずかに清水博士は「日本薬学古書文献目録」の中で、年代不詳の「跋太亜肪亜局方」四冊本をあげ「森田遷訳？」としていられたが、判然としたことではなかった。さて、千庵自身は文政五年六月十一日父甫三宛の書簡の中で「飜訳は先つ文法語脈之大意を得局方位は心易く相分り候」といい、この訳稿は静嘉堂文庫の大槻文庫本中にあって、「跋太亜肪亜局方訳稿」四冊本で、「草木之部下」一冊、「用薬篇」二冊、「金

Hosei University Repository

石之部」一冊よりなる。「草木之部下」の首においてはっきりと千庵自筆で「北越　僣菴森田徳訳」と朱書し「山吉文庫」の印を捺し、「金石之部」の首においては「時干文政五閏月念三日初之」「和蘭千八百二十二年」と明記している。後掲の書簡にも出て来るように千庵の師普山はこのバタビア局方を借覧し、「西医今日方」その他に引用するところが多かった。

この外、京都遊学の頃のものに「普山先生和蘭十六方文政癸未(六)」一冊自筆写本。普山の訳になる「泰西度量考」一冊九丁自筆写本。「挙家纂要訳稿」文政五(一八二二)一冊十四丁自筆写本。や、「舶品写真図譜文政癸未秋九月二日(六年一八二三)」一冊三二葉自筆写本で、一葉に一図ずつ着色美麗なるもので上欄に蘭文で名称を記しているものなどがある。

また、この京都遊学の頃に親交のあった人を二種の人名録及び千庵随筆より挙げれば、医家藤林先生、医家小森元良、医家宇野義兵衛、小寺沢鱗介、医家勝田玄恪字季鳳豊後日出、宮崎典膳、宮崎将監、医師伊藤舜民圭介、佐藤九八郎名千秋歌人、白嶺屋勇蔵、鳩居堂香具屋久左衛門、医師山崎玄東、医師伊丹直江、吉田屋治兵衛書肆、美濃屋硝子細工人、長松随友長州萩藩医、西尾含章、山田玄策、水野源之進、魔島助太郎、中嶋随軒、藤田佐五郎、井上九皐、仲伊三郎、松本寛吾、田中尚謙、天羽源蔵、田中利逸、田中三鼎、新宮凉庭、飯沼良吉、綴喜慶太郎、安建健司、熊倉平之進、伊勢や利衛、林東馬、松波雅楽頭、隠岐播磨守、藤木備後介、藤木越後守、梅辻典膳飛騨守、小出多門御使番、浜崎右門御使番、内藤長蔵、丸山柳沢藤林塾生、吉田冬蔵藤林塾生、田中仁菴藤林塾生、近江屋与八千物屋也、市田屋久兵衛米屋、若山屋茂七、大口広海、長沢伴雄、などの多きを数える

江戸遊学

千庵が京都から加茂の父へ送った書翰は文政五年六月十一日を以て終る。一たん帰国して父業を助けていたが、蘭学に対する思慕の情止み難く、翌文政六年、飜訳修業のため、江戸の宇田川塾へ入門することとなった。同年八月廿七日には江戸より郷里の父の下に書翰を贈り、父甫三から千庵宛折り返し長文の書翰を返している。

文政六年（一八二三）九月廿日附甫三より千庵宛尺牘

八月廿七日御認之書状九月十一日到来忝致披見候如仰冷気弥寒ニ御座候所其表無別条御入情御勤学之段致大慶申候此方拙宅始親類中何方ニも無恙営居候間御休情可有之候然ハ七月十八日神田橋御門外小川町筒井伊賀守様御屋舗内渋谷淡斎雅兄之方江御引移之条致承知候此御方は定而蘭家社中ニ而可有御座哉と奉察候返書之節伊賀守様石高御役柄淡斎師之御様子委可被申越候所

Hosei University Repository

ニより書状を差上可申と奉存候
一七月七日森下衛門悴忠七方江御誂之書状幷笄相達シ慥ニ落手仕候
一、佐州行両人之内幸庵七月廿八日参リ申候間先ツ手助ニ而御座候貫之介義者様子宜御座候ニ付来春三月中帰国之様子ニ申遣候
一秋山平八様行書状之写一枚懸御目申候間御熟読之八丁堀江御出被成候共随分丁寧ニ被成下国元ゟ金子為登不申候間無拠も今度気之毒ながら御頼申上候間先達而御用立置候金子一度ニ二三両か四五両ツツ少々宛も追々御渡被下度旨可被頼入候左候へ者幾度ニ而も参頼入候等宜ものニ而御座候勿論平八殿実父藤左衛門殿証文幷書状請書等迄差遣候間不取失様可被成候但金子受取申候節受取書遣申候而も可然哉証文ハ必手ばなし不申事若不残相済候節ハ格別也
一飜訳為修行越年之事被申越尤之話ニ而御座候間随分共滞留中致倹約諸費無之様御心附ニ而来三月中早速帰所可被致候相待申候
一家作継足普請之義者正太郎絵図面相工候而相応ニ面白候間麁図写取差遣申候御一見可被成候尤明年ゟ南ノ方者三ヶ年ふさがりにて御座候間当冬中地形取拵て地祭リ柱建姿等致し置明春にも建致可申候間造作之義は

貴様帰村之上存寄次第ニ可被致候これも物好ニ而致候事ニ者無之婚礼其外法事等御客宿リ之砌ハ手狭ニ而困リ申候間借金致し拵候事にて御座候依而倹約専一ニ可被成候
一蘭書婦人科之義面白之本無之由幸之事ニ而候間帰国之上ニ而追而先生方江御頼申置候而相求候方可然被存候入用之本相求候事も其地ニ而金子出来立申候者是ハ格別此方より余計之金子遣兼候間左様御承知可被成候
一唯吉殿事麻布善徳寺前亀屋専助方江九ヶ年季ニ而奉公被致候由夫は国元親達之被届候所ニ而御座候間其人之存寄次第と申ものニて御座候人之行末者天運次第貧福を生得と心懸にて外より婆言者難申事ニ而御座候
一鮭塩引味噌漬大根之義ハ追而之便リニ而差登可申候間左様御承知可被成候
一物入彼是打続キ毎年引負ニ相成候而内分差繰リ六ケ敷当惑致居候間成丈ケ先ツ物ヲ不買様ニ致し帰村之上貴様取働キ次第金子出来立候節近附之方江御頼被成志追高ニても不苦候間追而御求メ可被成候左候得者親之難渋成ル繰リ遣リ之心痛を休免孝心之基ニも御座候間此所御考可被成候
一其他ニ而八月十七日夜大風吹出し屋舗町方等破損致候由八ヶ年以前八月朔日之大風と同様成ル取沙汰相聞

Hosei University Repository

候此方ニ者風者一同ニ無之候而田方は豊作と申事ニ御座候乍併内検見無之と申程ニハ無御座門長ゟ前ハ皆無作其外沢々旱損地者追々内検見申参候先ツ水腐地ハ不残上作之姿ニ而御座候勿論米玉追々明春ハ相応引取可申哉と被察候得共慥と前広ニ者難斗候共袖之助大黒屋親子其外渋井左兵衛殿道達等江も宜御伝声可賜候此方皆共入書方々申進候程期後音之時可申遣候処恐々謹言

菊月廿日　　森田甫三

森田仙庵殿　貴報平安

猶々紙包ニて帷子四枚被遣慥ニ落手致候残リ壱枚者其許ニ御留置候事と拝察申候以上

秋山平八殿引下書写

幸便ニ付一簡啓上仕候其後ハ御疎音ニ相暮候得共時節日増寒冷之砌御家門御揃弥々御勇健ニ被遊御消光万福奉賀上候此方無別事営居候間御安慮被下度候然ハ悴仙庵義当夏中其地江出府仕候間定而貴家江も推参仕候哉と奉遠察候折節御見舞申上候者諸事御心添被成下御引廻之程奉希上候尤此者其表滞留中甚短金ニ付修行も成兼候趣申越金子又差登呉候様折々書状も御座候得共近年打続不如意ニ而繰り遣りも兎ニ角不行届ニ付彼是歎敷心痛致シ居候得共迚も為登金出来立不申候間何共気之毒千万ニ者御座候得共先達而御用立置候金子悴諸遣ニ少々宛成共追々御渡し被下度此段偏ニ奉希上候右之訳合仙庵方江も申送候間此者ゟも定而御願可申上候何分御勘弁之上御都合之所奉願上候乍筆末御令閨様始皆々様方江宜御伝声被成下度候此方愚妻も入書万々申上候可期後音之時可奉申上候　恐惶謹言

月　　日

猶々下拙事も先達而其表江出入一件ニ付出府仕候ゟ以来打続子供等相片附候諸費過分ニ而内々借金毎年相重候故誠ニ当惑至極致し居候右之訳ニ而悴も承知ニ者御座候得共修行之事ニ付無拠親元に金子相頼候事と被察候間彼是と思謀候へ者甚心配ニて不心知も落涙致候何分御推察之上仙庵方江宜御勘弁之所奉希上候以上

右の書簡により千庵江戸に出て、先ず「神田橋御門外小川町筒井伊賀守様御屋舗内渋谷淡斎」方へ落付いたこと、千庵が父に飜訳続行のため越年したいこと、蘭書婦人科の本を探していることなどを書き送ったのに対し、父甫三より来春三月には帰国されたい旨、また書籍の購入始め諸事に倹約をすすめ、滞在費に秋山平八なる人物に用立した金子を返済してもらい、それを宛てよとのことなど、こまごまと述べている。

文政六年十二月三日附千庵より父甫三宛尺牘

出雲崎幷に畳屋卯八両度之御尊簡難有奉拝誦候如尊諭

Hosei University Repository

時下厳寒之候愈御揃御機嫌能被為遊御座重々奉寿上候
僕儀こと不相変勤学仕居候間乍恐御尊慮思召易奉願上
候然者市川叔父様御帰国之砌金子借用仕候事何共無心
致方奉恐入候何れ篤と相調先達而市川ゟ借用仕候金子
之義ハ河船や安太郎殿又候出府有之候間其人帰国之砌
相頼差下し可申上候間其ニ而当冬ハ宜御差繰被下置度
候奉願上候　尚秋山平八方ゟ先達而受取候金子五両有
之候へ共是ハ此方の入用に仕候間此段奉願上候尤も余
計成金子遣込候様御思召被下奉恐入候へ共蘭書之字書
壱巻相求免其上不断の服着相抜候などにて御座候へバ
其ニ而七両斗りも相引候間此段左様思召被下置度奉願
上候金子無之候へば又貧生は其に相応に所業も仕候も
のに御座候間此段御案事無之様奉願上候
一秋山平八金子之義こと追々手ニ入候半ハ差下し可申
与奉存候間此段召被下置度奉願上候
一出雲崎御金便里に御とらせ被下置候鮭塩引壱疋外ニ
味噌漬入ニ而壱箱書物入壱箱書状壱封慥ニ落手仕候左
様思召被下置度奉願上候
一所業之義も何れ又吉雄忠次郎(20)ハ藤井芳亭(21)之方
へ春中ゟ相通ひ可申与奉存候尚追々可申上候
一家作之義被仰聞候趣御尤の至に奉存候何れ市川正太
郎と御相談之上宜奉希上候

一先達而市川帰国之砌差下候品則ち左の通りに御座候
一紙包　市川正太郎殿へ相遣し候品一封
一薬草之種子　十七種入
一猪口　壱ツ　渋川道直ゟ遣し候分
一書状　壱封
一袖桐油　是ハ拙者出府之砌持参仕候分也
　是ら相達不申候半ハ五人方へ御申越被下候御紛し
　奉願上候
〆外ニ　薬草之根　三品
　右之通り御座候以上
一太治兵衛一件之義も六左衛門殿迄書状遣し申候間尚
又宜被仰聞被下度奉願上候
一水戸様一条之義は猶追て聞質し其々可申上候
一鵬斎(22)之義ハ最早余齢も無之人殊に賀茂明神の籏
相頼呉候様申参彼是も御座候間少し書物相頼候尚出来
次第差下し可申上候
一渋川道達(23)老こと当夏中ゟ腰痛ニ而此節ハ起臥不
自由に御座候因是拙者方ハ近き事故折々見舞候其度々
薬方も相談仕差遣し申候へ供何分未に不馴事故兎角不
用様に相見申候唔々愚者ハ無致も無之事に御座候
一石川三之亟一件御申聞被下置難有奉存候何れニも其
心得ニ而其々相応にも相あしらひ申候間此段左様奉願

Hosei University Repository

上候

一癧癧之義ハ何れ未タ不経年月者ハ水銀膏又は其にテレメンテーナの油ヲ加へ外用可然奉存候内服之薬剤ハ血液を清浄にすることの則チ刺古石消石緩汞等のことの佳ならん猶ヘイステル外科書(24)訳出来次第写取備御尊覧可申奉存候間其書ニ付て篤与御検査被下置度奉願上候

一脹満之義ハ拙者治療仕候与李別段之義も無御座候矢張腹水ハ針を刺水を取る事気脹ハ内服ニ而駆風剤可然奉存候乍併其起原を篤与御見究被遊被下其症に随而施剤可然奉存候

一痘瘡区別之義は先日申上候熱病之区別とハ別なる事無之笘ニ御座候猶熱病論中之看法一番委く御座候間是ニ就て御検査被遊被下度候

一癲癇之病人は眼中に其閉塞の癖付候事故先ツ六ケ敷との事に奉存候外真の労療中風癲病是三病は何れへ聞合候とも同じ様ニ奉存候(癲病の事也)只血液のシケウルボイリを兼る事の様ニ奉存候

右は荒々両度之御尊報迄に如此御座候乍筆末御序之砌御母上様奉始免御家内御一統様方へ宜御伝声被仰聞被下度奉願上候書余ハ猶得後音万々可申上候此他何方ゟも残々入書申上候　恐惶謹言

森田僻菴　平徳

十二月三日

奉　森　家　玉　芳恵下

尚々御序之砌雲洞様へも宜奉願上候以上　追啓申上候先達而ゟ毎度京都普山藤林先生ゟ序砌宜申遣呉候様被仰下候此段御母上様へも宜被仰上被下度奉願上候

一京都東本願寺十一月十五日焼失仕ニ付此地懸へは殊の外奇附物多きとの噂承里候定而御地は馬鹿同様に取噺可申与奉存候　恐々謹言

則　刻

猶々此一紙ハ上野信解院の書役僧の作と申外方ゟ到来仕候間差上申候上野山中の書ともに御座候さて〳〵悪筆に御座候詩作も同様ニ候

尚々春中ニも相成御閑暇も被為有候ハバ拝聞仕御得意之詩御認免被下置度候外方へも為相見風聴可仕与奉存候へ共御書御籍無之方ハ無致方候間願申上候以上

文政七年二月二十六日附千庵より父甫三宛尺牘

御尊書難有奉拝誦候時下春暖日々相催候処御両所様奉始御皆々様愈御揃御機嫌能被為遊候由万々奉恐賀候小子義も不相変勤学仕居候間乍恐御案慮思召被下置度候奉願上候市川帰国之砌借用仕候金子早速御返済被下置難有奉存候且又去冬申上候通り金子不残も差上申度候へ共折悪敷綿入弐ツ枝田屋へ洗張に相頼遣し置候処三

Hosei University Repository

川町の火事の砌本店越後屋の蔵江相仕舞候処其蔵共都合蔵三ツ焼落申候間枝田屋ニ而も彼是多く焼失仕候事故致方も無之先以当時間ニ合候丈ケに取調へ候等に少々物入も有之其外先便も申上候通里外方ゟ至るの秘書但し書字ニ而当時公義様ゟ御禁制の本也少々物入も有之候へ共漸具相写し候積りに相成右ニ付此上紙代其外彼是の物入も有之候間先ハ五両差し上申候間御落手被下置候奉願上候右ニ付中々三四月などの帰国ハ出来申間敷奉存候間此段左様御思召被下置度く奉願上候殊ニ当時ハ藤井芳亭君渋谷両家ニて月に十八日之会日に下読も有之候間其日ハ其々相休候同様に御座候間写本も殊の外日間取可申与奉存候右ニ付金子御国元御差繰も御難渋の様子に被仰聞候間少々金子の有合せノ内に乍所業治療相始免被存候と奉存候　乍併其御地も追付ニは麻疹流行可有之与奉存候間其砌ハ百日も御手伝に相下り可申与奉存候間何れにも前文之趣御遠察被下置候四月上旬にハ田上三郎兵衛殿ゟ又候出府之人も有之候間其砌ハ又ハ其ゟ早々慥なる便も有之候半バ否御申越ノ様奉希上候右御返事承里候迄は矢張大黒屋陰居に独居仕候間一日も早く奉願上候且又年内迄ハ八丁堀状山の金子も少々宛にも相借候様心宛致居候処段々の様子承里候処当屋敷に於ても当時組下の同心の事故左程六ケ敷相申取立呉候義ハ無覚束御事殊更に当時平八殿事も自分ハ多病ニて一年に漸く半年位の勤と申事にて小児は多く有之候間此一件も六ケ敷事と奉存候故猶更拙者に於て難義の事に御座候猶其余其々の物入等も思の外有之甚迷惑には御座候へ共此節も無致方も次第に奉存候其外其々の物入は兼而御存も被為入候事故御遠察被下置度奉願上候

一明冬被仰下候水戸様一件之義ハ此地段々聞合候へ共何等之沙汰も無之候猶追而承里次第可申上候

一牧野備中守様御事は年内御上屋敷阿部備中守様御老中御引込ニ付此方へ相渡し被成候ニ付今度之義ハ諸普譜出来之上相渡可申与の従公儀様被仰渡と申事ニて此度の御屋敷替ニ付二万両の御物入と申事に御座候

一堀之内法花寺去年中ゟ戸入被仰付此節之風聞には住寺娘惣而坊主六七人も当月廿七日御刑罪有之候との事に御座候是は御城女中一件と申沙汰に御座候

一本願寺焼失ニ付三日三夜の早飛脚ニて浅草懸所へ申参里候処翌日一日之内ニ三千両之寄進ものと申候乍併是は心易き事に御座候へ共以後の奇進之処六ケ敷可有之と申沙汰ニ御座候其後ハ別条之風説も不承里申候下間遠嶋の義ハ不聞及候

一高橋越前守様長崎ゟ去霜月廿二日頃御帰府ニ而其後ハ今一応長崎御勤免有之候と申事ニ御座候然ル処此節

Hosei University Repository

は御勘定御奉行石川主水様(モンド)病気ニ而御退役と申事に而此度ハ高橋様御転役ニも有之候半ゞと申候小俣様等の御恐悦ニ御座候

一住吉屋三治郎殿出府ニ付扇面六本軽津産サリガニ三筒被仰付難有拝受仕候

一紫茉利硝子の尿器の義仰下され奉承知候後便相下し可申奉存候間此段左様御思召被下置度候

一渋川道達老義も先日申上候病眼ゟ肝蔵の閉塞相発し其ゟ黄疸を発し当二月十七日之夜四ツ時死去被致候悴甫仙子義も気の毒に奉存候へ共是とても無致方事に御座候

一此度三川町壱丁目の出火ニて日本橋橋際迄相焼申候田中金六様などは丸焼に御座候間市川ゟ見舞ニても遣し被成候哉乍序鳥渡書添申上候

一向上条源七事此度出府仕候間何れ奉公口を相頼申候間何れ世話も致し可遣候へ共国元の義ハ如何之様子ニて出府仕候哉と案事申候段と聞承里候処村松一件の事ニて甚タ不首尾と申事に御座候間先ハ其積を以取計ひ可被申候猶後便御申聞被下置度候奉願上候其余ハ近便取急き候間後音に残可申候乍筆末御序之内市川浅野其外御一統様へ万々宜奉希上候　恐々謹言

二月廿六日　　森田儁菴　平（花押）

奉　家厳大君　玉案下

猶々幸広ゟ相頼参里候医方纂要相求免さし下し申候間御落手被下度候奉願上候代料の義ハ則チ受取書差下し申候間左様思召被下置度候奉願上候

一畳屋卯八帰国之砌差下候品ニ封相達し可申与奉存候

嘸居被下候は御所業相始免今度始免に御座候が甚だ世用少く読書も多く出来心配もなく案心の者に御座候物入之義も寄熟仕居候も同様の事に御座候以上

これによれば写本に忙しくしていたらしく、舶載された公儀禁制の蘭書の写本に取掛ったらしく、詮索癖を唆られる。また同門の藤井方亭、渋谷淡斎等と毎月十八日を会日に定め蘭文読訳に力を合せ研鑽したのであって、ここで学問の他に蘭学社中のニュースも持寄られ刺激を受けたことであろう。これで思い出すのは、時代は少し遡るが天明の頃から享和文化にかけて江戸下町連の間で杉田玄白を中心に「病論会」(25)なるものを作って、始めのうちは毎月八日を定日としていたが、のちには十一日を原則とするようになった会のことである。解体新書訳述の会や新元会、病論会、藤井・渋谷・森田らの会、下って崋山・長英の尚歯会などを想起するとき、江戸蘭学社中には種々研究グループがあったことに気付く。文政七年六月十六日附戸塚静海より千庵宛尺牘

Hosei University Repository

（袋）越後蒲原郡加茂町
森田儛菴様　奉収　戸塚亮斎

華墨奉拝読仕候、如来諭暑気日々募候処、益御健勝被為在奉賀候、陳者今般貴方産物薬品御被遣被下候得とも下拙も此節種々雑事取込居候故御世話申候ことも相出来不申、別に一軒薬店ニ懇意之者有之候故直に三次郎殿を右薬店に差伺懸合為致候、此段御承知可為下候偖過日御出立之砌御預り申置候蘭書一冊御相談申候通金五両に求候人有之候へども国元に居候故早速之ことに行不申、愈々求置ことも数日前に相分り候位之ことも故未た金子も参不申候、何れ参次第此方より差出可申候、矢張春日町大黒屋へ出候て宜敷かるへくと被存候如何、今般御伝言に百疋位は引候とも宜敷様被仰越候得とも右申上候通五両に方付候故其儀には不及申候、下拙取替今般三次郎殿に相渡度存候へども此節少々不廻り故この義も出来兼候宜敷御高察可被下候

一御帰郷故旧知己之人相集定而佳興も可有之御座候へ共御再遊西学研究之処奉待入候、先は右申上度、貴答旁草々、如此御座候　頓首拝

六月十六日　亮斎

儛庵大兄　稀下

尚々永々白手竜脳赤島等も御序之節少し御遣可被成候ハバ望居候者御座候

繁昌している郷里の父甫三から何回か帰国の催促に会い、研究熱心な千庵も数ヶ月の江戸遊学を一先引き上げ帰国したが、この時同学の戸塚静海に自分の所持していた蘭書一冊の売却方を依頼したとみえ、それが五両で売れ口がみつかった旨江戸より加茂へ知らせて来たのであり、付け加えて江戸再遊を促している。この蘭書が何か、いまはしばらく疑問にしておく。

文政七年閏八月廿二日附戸塚静海より千庵宛尺牘

貴翰拝読奉候愈御万福奉賀上候、然は書物代金之義委細承知仕候得ども先方にて少々間に合兼候義御座候間今月中には出来候間此度は無相異大黒屋まで差出し候間右様御承知可被下候、右申上度草々如此御座候、委細後音可申上候　頓首　拝

閏八月廿二日

尚々委細三次郎殿に相噺置申候御聞可被下候取込中草々以上

これも江戸の戸塚静海から加茂の森田千庵に贈った書簡で、千庵が前記蘭書の代金が仲々手もとに届かなかったため、その督促状か、状況伺いの書簡を贈ったらしく、その返書である。当時としては五両の金を書籍一冊に投ずることは容易ならざることであったに相異ない。

Hosei University Repository

文政七年九月十日附千庵より戸塚静海宛尺牘

東都深川上木場天忠長屋ニ而　　森田儁庵

戸塚亮斎様　玉床下　　北越賀茂町発

三治郎帰国ニ付御華簡被送下有がたく奉拝誦候如尊翰時下寒冷日々相催候へとも愈御機嫌能可被成御座候然者小子不相変消光仕候間乍憚御案慮被下度候将局方金子之義委細三治郎与季承り申候毎度間違ニ相成候而ハ甚以迷惑之至御座候間何卒此度ハ無相違此人江御渡被下置度候奉願上候

一三治郎ゟ承り候処近き内御上京も有之申候由御帰路御立寄之程奉待上候野生事も直ニ出府可仕与存居候所彼是差支而已ニ而于今在国誠に残念之至奉存候乍併近き中にハ是非〳〵今一応出府仕度候間其節拝鳳眉万々御礼可申謝上候乍筆末御序之内　宇田川氏江可然御伝声奉願上候書余得後音之時　恐々謹言

菊月十日　　森田徳盛　頓首九拝

戸塚亮斎様　玉床下

やはり、蘭書代金五両の支払が難行しているとみえて、千庵の手元に届かないため再度督促している。この書簡で判明したことは、問題の蘭書が「局方」すなわち Bataafsche Apotheek であったわけである。何故手離したのかそのへんの事情を物語る史料をもたない。

文政八年二月十五日附戸塚静海より千庵宛尺牘

一書呈上仕候時下春暖相増候処其御地如何貴堂各々様無御別条可被成御起居奉恭賀候、次に小子儀道中無事長崎表に着不相替読書仕居候、御休意可被下候、陳者去秋は東都急々出立故書物代大延引に及大坂表より書状差上幷に金弐両添江戸小石川春日町大黒屋迄差出候、定而其御地へ相達候ことと被存候、如何御座候哉承度候、其余之処は当年中此地より差上度存居候、何連後便委細可申上候先書中も申上候通大坂北浜二丁目博多屋春十郎方迄御書状御届被下候ハゞ早速小子まて相達候間、其思召にて貴報御遣可被下奉願上候、先右申上度草々如此御座候　已上

二月十五日　　亮　斎

儁庵様　文台下

再白　当時参居候蘭医シーボルト誠に名家にて博学秀才に御座候、小子は門弟と相成日々親炙いたし誠に面白きことに奉存候、来春は同道にて東都に帰度存居候其節は何卒御出府可被成候、時下御自愛専一と奉存候頓首　拝

これは長崎籠町からの書翰で、件のバタビヤ局方売却代金が片附かぬ中に戸塚静海は遠来のシーボルトに入門

Hosei University Repository

すべく、文政七年秋江戸を立ち、十二月廿四日（新十一月五日）に入門することとなったのであって、代金二両のみがようやく片附き、この書翰の前に道中の大坂から親友千庵宛に書翰を贈っていたこともわかり、特に来春はシーボルトを同道して江戸へ上るから出府されたいと千庵の江戸出府を促している。このようにしてシーボルトの名声は日本渡来以後早くも草深い越後まで聞えたのであり、シーボルトの地歩の確固たることを知る。

文政八年六月十三日附千庵より父甫三宛尺牘

三太郎託帰国書奉玉案下時下厳暑之段相成候得共愈御揃御機嫌能可被為遊御坐奉南山候野生事も道中首尾能六月二日到仕候間御降慮被下置度候偖国元出立後ハ日々天気相続信越の中ハ至而都合宜候処碓井峠ゟ雨降続上武之二州ハ殊之外道路も損し高崎辺ハ誠に田の中乎行が如くにて大難義仕候着府後も三四日之間ハ雨天にて御座候へども漸此節ハ快晴ニ相成候因是関東筋ハ悪作ニ而可有之候奉存候去ながら拙者共出立之頃天気相続候間国元作方ハ宜可有之候奉存候

秋山平八事も去年八月病死仕候へども先ハ先張病中之申立ニ而倅家督相続相願置候間何方へも死去之趣ハ不申遣との事に御座候間迚も金子之義ハ出来不仕候尚平八病死之義御序も有之候半丶上町惣左衛門殿方へも御

知らせ被下度候尚死去知らせの書状ハ追而事方落着之上可申越候間其段宜奉願上候

渋川甫仙事も道達死後七日目に忌御免ニ而三十日斗り相立候得者直に道達同様に御匕幷に御預り共被仰付是迄之通りに御座候殊に妹幷ニ次男等も其々に相形付只今にてハ母幷に末の妹と家内漸く三人に相成り候間至而都合も宜可有之奉存候

兼而御願申上候淡斎蔵本之ハルマ写し候事此節藤井方ニても写し相始免候得共寄宿生ニさへも為写不申候位の事故淡斎に相頼候ても国元江持参仕候事ハ迚も出来不申候間此地に居懸り写し取候には明年秋迄相懸り可申候間此義如何可仕候哉其共源本主持之事故原文斗り国元ニ而相写し訳文斗り東都ニ出府いたし相写し候様に仕而ハ壱両年中に今一応出府出来仕候半当秋帰国可仕候其共再遊相叶ひ不申候得バ来秋迄此地に滞留可仕候間此段後者御申越被下置度奉願上候其後も彼是と写し懸ケ御座候間先ハ御報之参リ候迄ハ外写本相仕舞可申候間此段左様思召被下置度奉願上候尚原本も全部相揃候本と拙者主持の本と上金相添売替申候積りに御座候間此段左様御承知被下度奉願上候

九須竜様納額之義仰に随ひ越後坊と相尋候へとも下の御宮之別当にも有之又中の御宮之別当にも有之又奥之

Hosei University Repository

院付之別当ニも有之候由ニ御座候へども只不知して越後坊と相尋候処奥の院の別当安住院と申方へ人々差図いたし相教候故其方へ相尋候処同し越後坊ニ而も此安住院は高田ゟ石地出雲崎辺迄参り候との事に御座候因是納額之事段々委相噺し相頼候処早速承知いたし候得共堂内にて御本社の穴へ参り候処正面之右り之方に御座候間此方へ相懸ケ申べくと奉存候へども何れ同役並に御繕番等へも相談いたし一同見分之上懸額可仕候間暫一両日も障取可申候間額ハ相預り申候との事故其積りに取斗申候尤も当日御供料金百疋永代中御繕年に一度宛と申金一両奉納仕候外ニ納額料と申大工之日料並に御当番之方へ付届ケも致し候由ニ而南料壱片相置申候尚納額次第其日御繕献納いたし其上御祈祷之御礼国元へ遣スべくとの事に御座候尚金子壱両之利足を以テ年々中御繕献納いたし其年々に御祈祷礼遣し可申与の事に御座候額も献額中第一番之美額故院主も正面之右方へ相懸ケ度様子に相見へ申候真正面ハ天上卑〳〵候故懸リ兼候得ハ右之方宜敷

市川御叔母様月并ニ十ケ月御繕之義も五月ゟ相始免候積りに御座候間此段御申遣し被下度候尤も月々の御祈祷札ハ後ゟ相送り可申与の事ニ御座候間此段も被仰上被下度候奉願上候

拙者着府之義ハ巣鴨御籠町大文字や治郎兵衛方へ落付当時ハ矢張御籠町に藤井書生と同居いたし居申候間此段左様御承知被下度候乍筆末御序之砌御母上様始皆々様へ宜敷被仰被下度候書余期後音之時万々可申上候恐々謹言

六月十三日　　森田儛庵　平（花押）

家厳大君奉玉案下

尚々京都藤林ニ而も去年中惣領之太市郎死去いたし候との事に御座候小森も惣領出羽介(26)相果候由其上当年ハ親小森も相果候との取沙汰に御座候御序も御座候半バ藤林へ見舞の悔状御遣し可被遊様奉願上候以上

市川御叔母様月並御繕料之仕訳

月次御繕料　弐百文宛　十九ケ月分　第二十ケ月満月之御繕料金百疋　右之通相納申候以上

一度は帰国したものの懸案の写本をまだ残しているし、加えて戸塚静海のシーボルト就学の報を聞いて刺激されるところがあったのであろう。翌八年六月二日に江戸へ出府し、一先ず巣鴨御籠町大文字や治郎兵衛方へ落ち着き、間もなく同じ御籠町の藤井方亭方へ同居することになり、共に渋谷淡斎の所蔵するハルマ（江戸ハルマと思う）の写本を始めたのであった。

なおこの外第二回目の江戸遊学の時か先年の第一回目

Hosei University Repository

の際かははっきりしないが、前後二回の江戸遊学中、千庵の勉学を物語る資料は目録でわかるように、「榕菴秘笈」と刷り込んだ横卦用箋に千庵が書写したオランダ語辞書 Woordenboek Vertaalen en Verzamelen door Wigensin. te Jedo.(府韻篋検) 一冊と加毘涅多図譜 (Kabinet der natuurlyke Historien Wettenschappen. 1722) 一冊自筆写本（図十二葉添）と舶品写真図譜一冊自筆写本着色図三二葉で巻末に「文政癸未九月二十有二日於東都僑居模写」の文字がみえる三点のみである。榕庵からの蘭文書簡なども山吉家に旧蔵されていたというが、すでにない。

さてここで京都遊学の頃と同様、江戸遊学の頃に親交のあった人達の名を挙げておこう。医師岡道溪様、医師山田立長様、医師吉田意安様、小俣治郎八様、医師塩田脩三様、医師宇田川玄真先生、医師蘭学者宇田川榕庵先生、渋谷淡斎（小川町簡井和泉守様御内）、医師渋川道達（小川町柳原遠江守様御内）、男平治郎、渋井左兵衛（小川町戸田長門守様御内）、吉田長叔、秋山平八（かやばや）くしの前南へ行左の方にて、北八丁堀北嶋丁、井田定七、医師藤井芳亭先生（巣鴨加賀様御中屋鋪）、医師戸塚亮斎（芝三十軒堀号静海遠州掛川ノ人、宇田川塾生、シイホルト先生長崎）、医師坪井信道（美濃大垣人、宇田川塾生）、医師小邨梡斎（北越長岡人当時日本橋桶丁二丁目足立長雋男トナル、栄建ト云）、山田丈吉（藤井塾）、医師伊藤大鳳、医師大道中亭、兼杉道順、同蘭溪、原田九十九、伊藤良眠、工藤伯淳、山田正仙、茂野帯刀、平井俊三、河野越竜、佐藤玄珉、林主税、四方田喜十郎、岡田真澄、中屋治兵衛、卓郎（両国薬研堀（俳人））、川本幸民、青津篤左衛門、片桐道林（村松・河野越竜塾、室将監、斎藤泰蔵、佐藤甚助、中山新吾（北涯。下谷御徒土町通り加生藤様御屋敷之浦紅葉の庭木の有家の隣ニ住）、井上久次郎、と、これまた多い。

なお序ながら「千庵随筆」中に「蘭学高名家」として「東都馬場佐十郎、同宇田川玄慎、門人藤井芳亭、吉田長叔、伊予渋谷丹斎、美濃飯沼竜夫、浪葉春名一壁、橋本宗吉、長崎吉雄権之烝、吉雄忠二郎、尾州名古屋吉雄俊蔵、京都衣棚藤林泰祐、丹州崎陽吉雄門人新宮涼庭」と十三名を列挙しているが、いかにも当時の蘭学高名家の名を恥しめない人々である。

長崎遊学

ところで、ここで考えてみたいことは千庵のシーボルト就学如何という問題である。ハルマ写本のため九年秋まで江戸に留まりたいといっている前掲書翰と、次に示す文政十一年四月十五日の普山から、すでに加茂へ帰国した千庵に宛てた書翰から検討して、もしシーボルトに師事すべく長崎へ下ったのであれば文政九年か十年のうちである。しかし残存資料からは千庵のシーボルト入門を確実に裏付ける何物もない。筆まめな千庵のことであ

Hosei University Repository

るから必ずやシーボルトについて、あるいは長崎の風物についての記述あってよいことだし、京都、江戸と同じく、長崎で親しく交際した人々について長崎人名録とでもいうべきものが残っていてしかるべきなのに見当らないところから、否定的に考えたいところである。しかし「長崎聞見録」あり「漫遊雑紀行」あり「漫録」(文政戊冬臘月九年一八二六)があることから、きわめて短かい期間ではあるが、長崎滞在は確かとなる。かつ、ここに千庵のシーボルト就学説を裏付ける二つの注目すべき記録がある。その一つは、千庵の書き留めた「人名録京都・東都」の第九丁目裏の戸塚亮斎の項中「シイホルト先生長崎」なる文字を見つける。これが何故裏付けとなるかというに、千庵は自分が直接師事した師匠以外には、いくら当時高名な蘭学者に対しても「先生」の二字を附けないことからである。他の一つは、沢式氏が昭和九年に加茂へ千庵の資料を採訪され、その時千庵の筆写本一冊として「悉乙勃児咄著種痘書」を挙げていられることである。これは「シイボルト著種痘書」と読むのであって、シーボルトが牛痘の真偽を論じ、かつ牛痘伝種の法を記したものを千庵が筆写したものである。全十四枚仮綴一冊であったという(27)。　以上のことから一応、千庵は文政九年から十年にかけてきわめて短期間ではあるがシーボルトに師事した、としておきたい。

加茂開業

文政十一年(一八二八)四月十五日附普山より甫三・千庵宛尺牘

早春之御書忝拝誦仕候先以時下薄暑相催候処御家内御揃愈々御安静に被成御座候条奉雀躍候、次に当方無異に消光仕候間乍憚貴意易思召可被成候、陳者新年之御祝書添奉存候且又遠路の所懸御心頭御国産鮭塩引壱疋被贈下御厚情之段幾久敷忝拝請仕早速家内打寄賞味且つ日々之酒肴に仕相楽居候、御礼筆紙に述難存候愚妻よりも厚御礼申上く様申出候随て此短冊一葉麁末に御座候へども名家之読歌染筆故入貴覧、御笑留被下候ば忝奉存候

一小柳氏より承及候ば御両人様御勤にて御医業御盛之よし珍重に奉存候定て多分の御治療御経験も数多の御事と察上候、御奇験之事御序に承り度存候、僕依旧西書穿鑿のみ、此程は先年より忘居申候西医方選と申書を述作仕罷居申候、全部凡五六百丁にて十巻に仕候少々宛彫刻申付候事に御座候即ち試摺一葉入御覧候刻成仕候ば貴境へも相弘め度存候間宜敷願上候、乍末毫御家内様へも宜敷御致声被下度存候先は貴答旁々御礼迄草々如斯御座候、猶委細期後鴻之時候　恐々頓首

Hosei University Repository

四月十五日　　藤林泰介

森田甫三様
同　仙庵様　　貴酬

尚々追々暑気加候間随分御自愛専一ニ奉祈候扨は御繰合せも御出来被成候はゞ少々御登京被成かし御侍居申候御工夫可被成候追々年老兎角旧知己存出面会御物語仕度御なつかしく存暮候西洋の諺にも Oude Vrienden en oude Wijn Zijn best と御座候て尤なることゝ奉存候　草々頓首

文政十一年早春には既に郷里に帰り、また藤林普山との文通が始まった。これは普山からの返書で、甫三、千庵父子の盛業を喜び、次いで西医方選述作状況を試摺一枚を入れて報らせている。前編五巻にて、今日まで文政七年（一八二四）に出来たとされていたが茲に文政十一年と訂正されるべきである。

文政十一年（一八二八）五月二日附普山より千庵宛尺牘

芳墨辱拝誦仕候時下向暑之節に候処愈御満堂御揃御安静被成候由奉賀候、次に当方も皆々不相変無異に消光仕候間御意安思召可被下候、陳者去春は依百乙(28)進上仕候処相違し候条御丁寧之御挨拶痛入申候、○今般見事成る越王余算御手に入候処被懸御心頭御恵被下奉多謝候永く家に蔵の重宝仕候半と相楽申候、○竜脳油之

製法中消石精に投すれば沸騰して消解し上面に浮游するとの事是あるに沸騰不申条何様不審成様に御座候、併し拙者沸騰して後消解し候事何之書に御座候哉覚不申候、西洋のカンフルも我国之カンフルと違候ことは無之候、ケンフルの日本誌(29)にカンフルボオムは日本にてクスノキと云と御座候、其他誌書ニも日本に樟（カンフルチオム）を生る事毎度相見へ申候樟脳を本国に東方諸国にて求帰りアムステルタムにて精製致し候条御座候、然る上は樟脳・竜脳一物と致し候ものにて我彼異品にあらず但し一種ボルネオ国より出る物は天下最上の品にて是を生る樹違ひ候故名も少違御座候事名物考(30)に出せるが如し右にてみれば和蘭常用之品は薬肆販く所の白手竜脳之方と被存候、梅花之方はボルネオカンフルに御座候併し皆通用仕候長崎表へ持渡候節竜脳をカンフルバアロスと申候へ共此名儀を註釈致し候書を見るにたたにカンフルと御座候、竜脳、樟脳、反脳等製之精粗にて分つのみ故に同性同功之物に候猶沸騰之説御座候右三品何れも御ためし可被成候様可然哉に存候○分量考中フウト尺エル尺之図可有候間写し上候様承知仕候フウトは所指仕候故鳥渡図して入御覧候エルはフウト二倍とボイス(31)に相見へ申候右分量考も近々増補よほどよろしく相成申候間一両年中に上木仕度存候。

Hosei University Repository

江戸大槻氏にて上木致し候分量考一冊進上仕候但し此分量考は余程杜撰にて証に取かたし我邦の秤にて一々掛たる所にてゲレインを二厘に見立有候へばダラクマと積り候所にて一匁二分といづべき筈なり、拙者又々当年も段々和蘭の分銅取寄改候所分銅には少々の違ひも有之候故何分算にて推ずしては厘毛弗は眼力にて定めらるゝものに非ず種々に合し又は散して算するにタラクマは一匁二分五厘と相見へ申候それを六十分致しケレインの量を定むる外なく被存候愚妻に御加筆被下同人恭悦申猶宜敷御礼且御伝申候様申出候乍末筆殿方様にも宜敷御伝通奉希候先は貴答御礼旁々早々如此御座候　恐々謹言

五月二日　　藤林泰介

森田千庵様　貴答

尚々追て暑気加候間随分と御自愛可被成候此頃は文法等之事も追々新説出来申し候近年には委敷事と相成可申候定而貴境も追々西学御開被成候御事と奉存候何にても相応の御用事候はゞ御申越可被下候

○レインランド、フウト半分の図

此尺小割皆此の如し。一寸とも云ふべきを一ドイムと申候。右長さ図の通りに少しも違ひなし但し半分図に御座候ハゞ此通二つ分の長さにて一フウトに相成申候間御積にて御作り可被成候、都合十二ドイムにて一フウトに相成也毎トエムを又十二リニイに割とショイメルかの説に候へ共此レイラント尺にては図の如く八リニイに割御座候アムステルタム尺も此通りの長さに候エル法此尺の長さ二倍即二フウトに御座候

○此節は何書御訳被成候哉御出来之物候ば御訳本拝見仕度候江戸表にて珍書御手に入り候ば外題御聞せ可被下候御間暇も候はゞ少々御登京待上候追々社中も出来候へ共篤志少く困り入申候早々頓首

普山が千庵にイペイの「和蘭薬性弁」を贈ったことや色々薬物の実験の結果についての問合せに答えており、特に大槻出版の分量考を「杜撰」として、自らはオランダの分銅を取寄せて研究している。普山の学究心の旺盛さを物語るに充分。

文政十一年（一八二八）五月八日附普山より千庵宛尺牘

小柳久右衛門殿上京に付貴札被下忝拝見仕候時下向暑之砌御満堂御揃愈御多祥に御起居被成候御事奉賀候次に弊家依旧無異消光仕候間乍憚御省念可被成候然ば当年は久右衛門殿上京例よりは遅く候故御左右も無之如何の御事成と御案申居候処御動静承り悦上候、扨者昨年願置候青地家譜(32) 幷に感状類御写し取御見せ被下奉多謝候殊更感状類は御倫写と相見へ御煩労と存忝次

Hosei University Repository

第に御座候

一、紺青石製法罷成数品御恵被下是亦深忝奉存候段々御面倒恐々之御事に御座候、其御地右製法家存候も居不申由に御座候ば最早委敷御聞正し不被下候共此度之仰之趣にて何事も十分相分り候間彼此御配慮被下間敷様希候、一、此頃画帖被成候に付官家色紙短冊類処持し上候様被仰越承知仕候然処処持無之何分此度は差上不申候尚追々取集呈上候様心懸け居申候間又々幸便之節は御人御立寄らせ被下度奉存候

一、分量考も今少し不吟味に候間追而差上申候様可仕候。乍末御母堂様始殿方様へも宜敷御伝声被下候様願上候

愚妻も宜敷申上候様申出候、先貴答まで草々如此御座候委曲期後鴻　恐々頓首

五月八日　　藤林泰介　紀元（花押）

森田千庵様

尚々小柳氏より承り上候市川様には末頃江戸滞留之由御帰国候はゞ宜敷御伝可被下草々頓首

文政十二年（一八二九）六月一日附普山より千庵宛尺牘

当早春之貴墨到来承知仕候処御令尊去歳九月十一日御発病にて十四日御養生不相適御往生被成候由驚入申候貴殿には御愁傷可被成と遠察仕候併し御天寿無致方儀

に候へと折角く御自愛被成御家事御勤被成候様致度奉存候随て甚軽少之至に御座候へ共御線香料壱包差上候間御霊前江御手向被下候ば忝無奉存儀候御悔申上度験迄に御座候乍末筆御一統様へも宜敷御悔被仰上候様願上候愚妻も呉々御悔申上候様申出候先は御悔迄草々如此候　恐々謹言

藤林泰介

紀元花押

六月朔日

森田仙庵様貴酬

尚々時節御自愛専一に奉祈候草々頓首

一、御亡父様容躰書にて御病深相考候に御性質御多血歟又は痔血閉様之事御座候て血分頭脳に衝逆致し候事と被存候譫語眼中赤脈等皆脳煩腫条に御座候十四日腰痛頻なるに由て見れば鬱血腰腹にあり血下降宜を得す不以止頭脳に逆して眩暈するか何れ共多血より致候症には相違有間敷被存候ある治法は第一刺絡し百目斗り血を取り回生水或醋を面に濺き肛門より屡導方を施し内には清涼下剤加味梅肉湯宜腸清涼飲翹を与へ兼て湯脚法を頻々にし腓腸に於て発疱膏を伝るの類ならんやに存候何れ清涼の他術無之様被存候先は右愚案申上候迄候草々以上

方名は西医方選に見へたり

千庵の父甫三が文政十一年九月十四日に脳溢血で死去

Hosei University Repository

した報に接し、普山は悔状を認め、その中で刊行したての西医方選をひきながら療法私見をこまゞゝと書き贈っているなど、医家普山の面目躍如としている。

文政十二年（一八二九）六月一日附普山より千庵宛尺牘

芳墨辱拝読先以時下向暑之節に御座候処御満堂御揃愈御多祥奉賀候次に当方無異に消光仕候間乍憚御懸念被下間敷候陳者昨年霜月十二日大地震にて中越後大変に御座候共貴駅は破損も少く潰家も二三十軒斗にて殊に貴宅に於ては御別条も無之候条目出度存候、扨々三条大橋為衛門母共即帰山赤壁等焼失、燕田巻ぎにも主人両人即死之由気毒申迄も無御座次第候誠に前代未聞之御事御座候。昨年は天変多き年にて定て御伝聞も可被成九州は大風雨鍋島三十五万石御領分斗りにて即死七千五百七八十人怪我人七千八百人斗合之壱万五千余人損し候、幷東海道筋も大洪水多人死亡之由也、又候当年江戸表之大火にて一万余焼死之由宇田川より申来候以来ケ様之義無様に致度と祈事に御座候　一、太西医家薬物を四つと定候儀は四液家之他には覚不申候、八つと致しは一向不見聞説に御座候是は先師海上老人何事も八つに定られ候へども是迚も其書成就不致内物故被致候故拙宅にも名目処持不仕候、和蘭にてはラホイシイル(33)と申人出て万物之原始四十八元と致し候未だ訳書は無之候　一、マグネシア代金二歩御遣候確に落手即半斤取寄差上申候御落手可被成候当時壱斤に付金一両宛に御座候故御調度半斤に相成申候　一、遠路之所被懸御心頭御国産之干真鱈三尾御贈被下御厚情之段不浅忝拝請仕候且家族共へ御加筆被成下何れも忝なく存候て尚宜敷申上候様申出候　一、昨年も鳥渡御噂申上候西医方選初め五冊彫刻仕候間入御覧候貴国御近辺にも望人候ば御風聴被成下御売弘め可被下候代金五冊壱部にて百疋宛に御座候宜敷奉願候御存之通財乏く候所大望にて困入候間一部にても多分御世話被成下候ば別て忝存候次の五冊彫立候ば全部成就仕候勿論当時最中に彫らせ居候間盆前には成就可仕と存候　一、此程は御独歩にて嘸御多用と奉察候共御見合久々御出京被成候様奉侍候乍末筆御母堂様御一統様江も宜敷御声致被下候様願上候先日真木屋尚平殿帰国之節御報可申所折節取込居及延引候此段御免可被下候先は御答迄に草々如此御座候委細期後便之時候　頓首

六月朔日　　藤林泰介

森田千庵様

尚々追日暑気加候間随分と御自愛専一に被成様祈上候乍憚三条拙者知縁之家と燕同断御幸便も御座候は拙者よりも宜敷御見舞申呉候様御頼申候条御伝可被下候様

Hosei University Repository

願上候将和納在中村津ケ辺に便候ば久敷左右も不承候
如何致被居候哉乍憚御尋被下候様願上候　草々以上
文政十一年十一月十二日越後の大地震に対して見舞を述べたあと、前述したごとく海上随鷗が八譜を成就せぬうちに死去したこと。西医方選前編五冊刻成り、代金百疋で売り弘めたく依頼している。次いで後編の準備をしていることを報じているなど興味深い。

年号不明の書翰一通を紹介するが、藤林普山が越後に来たことを証する唯一の史料である。来越年号は不明であるが、三条の大橋氏は文政十一年の大地震で死亡しているのでそれ以前のことと考えられる。

一筆啓上仕候、時分猶冷気弥増之節に御座候処愈々御安全に被成御勤学珍重至存候随而拙老道中無事にて当月四日に帰宅仕候間乍憚御心易思召可被下候誠に逗留中は日夜御苦労に相成不浅辱奉存候扨々当地も殊之外蘭学盛に相成(34)申候何卒御地も御力を以て盛になり候様祈上候将出立之節は種々預餞別忝存候何卒来春は早々御出京被成候様奉待上奉候
先は右御礼方々草々如此に御座候　謹言
九月十一日　藤林泰介
森田儛庵様
古川越竜様　貴下

二白追々冷気と相成候間乍憚御自愛祈上候　草々頓首
尚々大橋石田、帰山何れへもよろしく御伝被下様願上候　頓首
上　蒲原郡賀茂町　森田千菴

一翰啓上仕候時分柄朝夕冷気相催候処弥御勇健ニ可被成御勤役万福奉賀上候然ば此度家伝之一粒丸御領内へ売弘度趣御願申上候処早速御聞済ニ相成兼而御触流し被下置候ニ付玉参仕候而御願申上度奉存候へ共無拠病人等ニ而罷出兼候間甚心外之至ニ御座候へとも以代人御願申上候間乍御世話弘免方之義何分宜奉願上候　右御願申上度以書中如此ニ御座候　恐惶謹言
丑八月廿七日　加茂町　森田千菴徳盛

父甫三死去の翌年、家伝の良薬「一粒丸」に、新に蘭方の薬学知識を採用し、改良を加えて、改めて領内に売弘め方を出願している。現に、加茂の小柳家には「Hollandsch Remedie 一粒丸」と刻した 78×24 cm ばかりの木製大看板がある。漸く亡父の跡を継いで、家業に専念することとなった。

天保六年（一八三五）七月二十六日附藤林普山より千庵宛尺牘

本月二日御認之華墨昨日相達拝読仕候先以残暑甚しく御座候処御満堂御揃愈々御満福之由珍重不斜奉存候随

Hosei University Repository

分草宇依旧無異消光仕候間乍憚御懸念被下間敷候陳者当春も御細書被下殊御国産鮭一疋贈被下遠境之処不相替被懸御厚情候段深忝拝味仕候仍て早春に御答可申処持参致呉々に名姓等承り置不申何方へ可差出様も無之等閑に打過申候真平御許容可被下候又候今般御思召寄御菓子料として南鐐壱片預御恵忝拝請仕候併し毎々痛入候次第御座候　一、先年御頼置候色紙短冊類彼此願置候得共兎角集り兼ね申訳も無御座仕合に御座候何れ追々取集可申候間来春之便迄御待可被下候来春は多少に依らず差上候様可仕間左様に御承知可被下候

一、職方外記之儀とんと不苦候間寛々可被成御覧候

一、医心方之儀御親切に忝く奉存候是亦いつにても宜敷候間願上置申候

一、軒粉釜元之儀今明日中数合を別紙に可申上と申候

一、昨年霜月には江戸宇翁(35)儀肺癰にて黄泉に趣被申残念に罷有候。然る処拙老も当夏五月八日より肺炊腫急発仕大に苦候放血瀉制等にて急症取ひしき候得共其後に今痰中に膿を帯び身体羸瘦甚敷併し追々気力健に相成候故少々宛治療に罷出申候始之頃の如く盗汗潮熱抔は無之死を免れ候様存候間乍憚御心易思召可被下候膿のみ相出候様日々薬用罷有候毎々家族共へ御加筆忝存奉候尚何れも宜敷くと御礼申上候様申出候先は右御答申上候迄に如此御座候　草々謹言

七月廿六日　　藤林泰介

森田千庵様貴報　　藤紀元　花押

尚乍憚御家内様方幷に市川家江も宜敷御致意被成下候様伏て願上候

一先年御恩借申上候バタビア局方明春迄御貸置被下候様願上候　草々頓首

父亡きあと千庵は加茂に腰を落着け、家業に専念するのであったが、その後も普山との文通は絶えず、この書翰からすれば蔵書の貸借も行われ、共に研鑽を怠らなかったことが伺える。しかし普山は文中の肺炊腫なる病が致命的であったのであろう。翌天保七年（一八三六）一月十四日五十六才の生涯を閉じたため、この書翰が千庵に贈った最後のものとなってしまった。

時に千庵三十八才、まさに働き盛りであるが、その後の活躍を明確に物語る資料を持たない。ただ越後加茂における千庵の動静の若干を推測し得るものとして、煩を厭わず以下の書翰を紹介しておく。

年号不明であるが、江戸より加茂へ届けられた書翰としては、宇田川塾で同門であった藤井芳亭の尺牘がある。芳亭は吉田長叔と同じく加賀藩医となり、江戸定府の身であって加賀侯の巣鴨中屋舗に居を占めていた。前述し

Hosei University Repository

たように、千庵第一回江戸遊学の頃には毎月十八日を会日に定め蘭書を読み合い、第二回遊学の際には同居した程の昵懇の仲であった。文中蝋燭一箱の礼を述べ、永らく借用していた大同類聚の返上方を申し述べ、江戸の蘭学界のニュースとして天文台や Nieuw Spraakkunst（新文法書）にも話が及んでいる。

十月二日発貴牘辱拝見仕候、時下寒気相加候御揃愈御清栄被成候段奉賀候。然者近辺火災之旨御聞及ニ付遠方之処態々御伺被下殊ニ御国産有明蝋燭一箱御恵投被成下段々御懇之至千々万々奉謝候、家族一統宜敷御礼申上候。大同類聚長々拝借辱奉存候今更返上仕候御落書被成下度候○先達而も御手簡被下且何寄之品御恵投奉厚謝候、御返事も不申上申訳も無御座候宜敷御海容被下度候○此節司天台へ猪股参り度く罷出候処ニーウェスプラーカコンスト持参承候処甚面白キ事ニ存申候今日甚事多御返事迄申上候何も後便可申上候　敬具

十一月二日　藤井芳亭　花押

森田千菴様　玉机下

次に川本幸民の尺牘を紹介しよう。宛名の森田正治は千庵の親戚にて、越後柏崎に住し、医を業としていた。子孫は現在も柏崎にあって、開業医を営んでいられる。

江戸木挽町　森田正治　九拝

川本幸民様　尊下用書

従越後柏崎　江戸木挽町　川本幸民

越後柏崎　森田正治様　用書案

賃銭相済

封　八月廿日　認発　私意

一書啓上仕候秋冷若水御座候貴家御揃愈々御安清可在御座珍重奉拝賀候　当方幸無事御放慮可被下候先達ハ御投牘被下早々可及拝答之処五月以来公用繁多寸隙無御座殊外及延引候其節被遣候書画帖も漸相認見候得共御存之通手習ハ不致児童之時以来之書風差上候も却而恥入候得共御断申上候も如何と存無拠相認候此詮書画帖ニ加へ永来ニ伝ハリ候てハ不束候間御一見後御火中可被下候別ニ近作一首入御覧候御笑吟可被下候　○貴地へ参候ガルハ器之説如遣承知仕候訳説可申上様被仰聞候得共一寸ニ認兼候観瀾広義御覧被下候製作之法気象之理明白ニ相分可申候○貴地夏作十分之内秋穫も定而満登と奉存候諸国共両三年分出来候評判ニ而此頃米価俄に下落いたし候併し小売ハ格別之差無之由蔵前ニ而ハ百俵ニ付五拾両斗下り候諸品共同様高直困却いたし候○先便ハ珍肴御恵投被下難有久敷相用申候○春来

Hosei University Repository

ポトガラヒーと申写真図製作ニ刻苦いたし五月来漸出来上り大楽ニ御座候近処なれハ可入御覧且正像を取り差上可申候なれ共遠方致方無御座候此頃紙ニ写し方々取掛り居候出来上り候ハゞ可入御覧候右ハ拝答旁何と申し延引御断迄早々如此書中重信可申尽候　頓首

八月廿日　　川本幸民

森田正治様

尚々時下折角御自重可被成候皆様へ宜敷御伝声可被下候妻ゟも宜敷可申上申出候以上

森田正治が幸民に書画帖を頼んでいたのが、ようやく出来たから近作を一枚添えて届ける旨、ガルハ器の件は彼の訳著気海観瀾広義を見られたき旨、苦心の末五月に写真機がようやく出来上ったことなどをのべている。彼が写真術を試み銀板光画に成功したのは嘉永四年（一八五一）四二才の時である。

越後加茂

森田千庵様　　川本幸民

奉復　　従東都芝田町五番地

貴書拝読仕候如命寒威日々増加仕候処高堂被為揃御清穆被為成候段大慶之至奉存候　弊堂老少無事消光仕候御放慮可被下候正治君御遊居之節諸事不行届のみ御気之毒奉存候永々御病気之処御帰国之後ハ御全快之由承之雀躍仕候扨此度ハ若鱈数尾御恵被下難有拝受仕候早々御伝法之通里相披拝味可仕候先ハ御報まて草々如此御座候後便万縷可申承候　恐々頓首

十一月二十二日　　川本幸民

森田千庵様　座右

尚々追而甚寒為道為人折角御自愛奉祈候海苔少々呈上不足報酬候得共御笑留可被下候以上

前記の森田正治が江戸へ遊学したことがわかる。幸民に師事したのであろうが、病気で帰国したので、千庵がかわって、その後の容躰を報らせてやり、御礼に若鱈数尾添えたのであった。その返事がこの尺牘である。幸民は返礼として江戸浅草海苔を贈っている。

森田千菴様　玉案下　　小邨梡斎

〆　二月五日　　長岡表二の町ニ而

当月二日之芳墨昨日相達候拝読仕候、如仰新年之御慶千里一般芽出度申納候、先以御軍家御揃御超歳之由奉歓朴候、随而弊屋無恙加算仕候、御放慮被下度候、此方ゟ可得貴意之所返而預御祝詞奉痛却候、次に被仰越候分量考則差上申候、御心静に御謄写可被成候、乍併座右書に御座候間御写済次第御返可被下奉存候、右本中にとぢ込置候点類通考ハ榕庵未校之書に御座候間差上兼候へ共合本に致置候、無拠差上申候、少しハ御考

Hosei University Repository

之益ニは相成可申哉に候得共草稿書に候間御引証被下候てハ宇榕迷惑可仕候、其心にて御らん被下度候。扨々御心にかけられ銘茶一折御恵被下千万辱拝受仕候、倦学之節手煎相楽ミ可申候、雪消候ハゞ何れニ茂御面会可仕日日解氷之節を屈指相待申候、如貴諭俗事紛々には当惑仕候、先は御報まで如此御座候、尚期重便之時候　匆々　頓首

仲春五日　　小村梡斎　智杵（花押）

森田千庵様　玉案下

尚々時下春寒候、御自愛専一奉存候　以上

右の尺牘は越後の長岡藩牧野侯の侍医小村英庵号梡斎からのものである。千庵が貸与方を銘茶を添えて依頼したのであろう分量考を貸し送っている。注意すべきは、その分量考と合綴になっている「点類通考」なる稿本である。梡斎ものべているように宇田川榕庵未定校書であることから引証しないでほしい旨書いている。榕庵の「点類通考」については今迄浅学にして知っていない。あるいは今まで全く知られていない草稿なのかもしれない。

森田儛菴様　玉机下　　小村英庵

先日ハ偶々参上仕不存寄預御饗応千万〳〵難有奉存候一両日逗留仕宮本院様へも尋申度心得候へ共余々重き御饗応にて御勝手之御煩労を恐れ早々御暇仕候近山薬

泉鉛山等一見不仕殊ニ残多奉存候、乍憚御内君様始御惣客様へ宜敷御礼御通話奉希候、陳バ御郷里之物産幷薬泉医法相認メ呈上仕候、外ニ亜爾鮮射香十少々薬本ニ進上仕候、且其節御願申上置候天ケ沢油を取り候捨水小川ニ成ハ流れ候処一壺幷ニ御近山薬泉も一一壺御取寄御送り被下度奉願上候、御近山之薬泉ハ其泉口御一覧被下委敷共書記し被下度候、尤御立越被成候ハバ其義も不及候、又御自身真薬泉を御鑒定も可被下候、○天ケ沢へ何卒取立湯治場ニいたし度く是も御序ニ御覧可被成候、恐クハ草津の温泉ニ次キ可申功能と存候、貴地宇随主人にも御話し可被下候、尚御尋被下度候ハバ宇随主人成共私成共御遣し可被下候、茅屋ニ候得共宿仕候、河内谷ニハ定而産物あるべし、此地へも入て見たき事也、村松領内ニハ貴品多ク産セル事予カ技ノ如ナルへし、尚薬物御穿鑿御出精奉祈候以上

五月廿二日　　小邨英庵

森田儛菴様

（端裏書）

加茂町　　長岡

森田千菴様　玉机下　　小林英庵

態々御使被下御厚情辱奉存候、如仰下炎熱相続候処俄冷気相催候、先以御渾家御繁栄奉賀候、然ハ梡斎事御

Hosei University Repository

案事御尋被下千万忝奉存候、私共へ対し而ハ聊も不孝之筋無之候、近年当家江被召出五人扶持ニ而御家来ニ被成候処当藩中人気あしく朝夕へき合に当惑いたし行衛如何と心配いたし居候内元来江戸子故田舎之住居不相当ニも御座候や、風与欠落し殿に対してハ不忠ニ候得共格別之不埒と申ニ而も無之候、依之宇田川ニ而先年二三年も同居可致旨榕庵ゟも申遣候、只小子老年ニ及迷惑いたし居候二三年之内ニハ何とかいたし方も可有之と風与心付工夫いたし居候、当時小子眼気あしく病用差支日々悴事思ひ出し申候、是亦一箇之時運とあきら免候外無之候とふぞ其内御見合御来駕奉待候、眼病故筆のたてとも無覚束匆々貴報申上候以上

八月朔日　　小林英庵

森田千庵様

落字書損御免可被下候

千庵と小村英庵とはしばしば往復があったらしく、温泉場開設にも苦慮している。多芸な人であったことが伺える。後年この計画はかなり具体的に進められたが、事業としては失敗したと伝えられている。小村英庵は宇田川塾出身の江戸子であって、同塾で千庵と知り合ったのだった。長岡藩における英庵は勤方がしっくり行かず、加えて眼病が悪化しており書翰を認めるさえ、不自由している。してみれば同門の千庵が近くにいたことはせめてものなぐさめであったろう。(36)

拝見仕候、如命追々暖気罷成候之節弥御安栄大喜不浅奉寿候、陳者昨日は稀ニ御尊来之処相悪他行背本意候、兼而御預り申上置候蘭書之儀御返却申上候間御落掌被下度奉存候、尤賢林子江売渡し候分は直ニ尊公江代金相添候儀ニ罷在候様相心得居処未タ不残共不相済由被仰聞驚入候儀ニ御座候様申上置候儀不存も寄其上同人事去月下旬病死仕候間左様御承知被下度奉存候、右御報申上度如此ニ御座候　以上

四月廿八日　　嶋津琢斎

森田千庵様

拝誦仕候然はハルマ壱冊ヘーステル壱冊不足仕様御申聞ニ御座候得共兼而御承知之通活字板を一集ニ金三両之訳ニ差遣し置候儀ニ付先刻も申上候通私共へ残而相返し候訳尊公江而已申上置私江は一向不沙汰之儀ニ付不残共代金相済候儀も相心得居候処御引合御座候得共先刻申上候通之次第御座候間左様御承知被成下度奉存候、右貴酬まて如此ニ御座候　以上

四月廿八日　　琢斎

千庵様　玉机下

右の二翰は同日のもので後者は追っかけ認めたものと

Hosei University Repository

思われる。嶋津琢斎（名震、号尚友堂、通称圭斎）は越後北蒲原郡五十公野の村医であるが、文化中江戸宇田川塾に入門したと伝えられ、蘭方医であった確たる証拠として彼が自から画いたヒポクラテス像がある。他に「花譜」一巻がある(37)。今回千庵との交渉があったことがわかり、特に蘭書を借用し、また蘭書の売払いにも力を貸しており、ハルマの辞書、ヘーステルの外科書にも言及している。

む　す　び

以上四ケ所の森田千庵関係資料に基づいて、(1)千庵の伝記を試み、(2)千庵の業績として、「抜太亜肪亜局方」の飜訳、「八譜」の写本、「一粒丸」等について考察を施し、(3)千庵の手記に係る「人名録」二種と「千庵随筆」から化政期における京都（主として藤林普山塾）の蘭学者群、および江戸（主として宇田川塾を中心に）の蘭学者群をみて、その交流にも触れ、(4)越後の蘭学者達にも話が及んだ。更にわずかではあるが、(5)道中小遣帖などから蘭学修業者の経済事情の一班を知ることができ、蘭書・飜訳書の価格についても若干知るところがあった。

残された問題も多々ある。例えば千庵の医術の実際、医学方面の飜訳力・力量等については筆者の力の及ぶところでない。また、蘭学者の持つ基礎学力を伺うべく、千庵の蒐集した図書を「蔵書目録記」から考察したが、この分は目下「越佐研究」に待刊中である。

森田千庵関係資料目録

一、新潟大学医学部図書館（未整理につき蒲原宏氏保管）

1、産弁・別冊附図　四冊
　自筆稿本、六二・六九・六三丁・附図三四頁、27×18cm

2、巣守二十一剤　附丸散方函草稿　一冊
　自筆稿本、三十丁、24×17cm

3、漫録（医学随筆）　自筆稿本、十七丁、24×16cm　一冊

4、国医考　自筆稿本、三十三丁、25×18cm　一冊

5　游気論　自筆写本、十丁、25×18cm　一冊

6、泰西度量考　自筆写本、九丁、24×18cm　一冊

7、挙家纂要訳稿　文政五午年　一八二二　自筆写本十四丁24×18cm　一冊

8、舶品写真図譜（文政癸未秋九月二十有二日（六年一八二三））　一冊
　自筆写本三二葉22×16cm　一葉一図着色上欄に蘭文名称

9、加昆混多図譜　完（Kabinet der natuurlyke Historien Wettenschappen. 1722）　一冊
　自筆写本、十六丁、図十二葉、22×16cm

10、紅毛水薬法　吉雄永章訳　自筆写本、五丁、26×16cm　一冊

11、Tabula anatomia door J.A.kurmus. MDCCXXXIII. 一冊
　自筆写本、一〇〇丁、23×17cm

12、LIV. Hoofdstuk. van de Kinder Pokies. (Vatiolae)　一冊
　自筆写本、二〇丁、22×17cm

13、Hollandish en Japansch Woordenboek（西語訳撰）der taalen door Ba. Zazuro.　自筆写本、横帳二二四頁、16×22cm　一冊

Hosei University Repository

14、Dictionarium of te Woordende Spraeck-boek. in de duytsch ende malaysche tale. 1703. Amsterdam. 一冊
自筆写本、横帳八九丁、16×23cm
15、Latijnsche en Hollandsche Woordenboek. 一冊
自筆写本、横帳三一八丁、17×25cm
16、Woordenboek Vertaalen en Verzamelen door Wigensin. to Jedo.（府韻篇検） 一冊
自筆写本、横帳五五九丁、18×24cm、料紙は「榕菴秘笈」の文字の刷り込まれた横卦用箋を用う。
17、語法略解印譜 三七丁（うち五丁白紙）25×18cm 一冊
18、ヒポクラテス像 毛筆墨書、8.8×8.2cm 一枚
19、文尼久須臍水丼舉水篇 文化丙子十三（一八一六）藤林普山自筆訳稿 五丁、25×18cm 一冊
20、灸点図解 丙子（文化十三年一八一六）写本（父甫三のもの）十五丁、25×17cm 一冊
21、賀川産書 写本（父甫三のもの）二八丁、25×17cm 一冊
22、藤林普山より甫三宛尺牘 四通
23、藤林普山より甫三、千庵宛尺牘 一通
24、藤林普山より千庵宛尺牘 六通
25、戸塚静海より千庵宛尺牘 三通
26、岡甫庵より甫三宛尺牘 十二通
27、円印（海松材） 一ケ
印文は「JAUWDIU DAUW. TE IETYGOKAMO. MOLITASENNAN.」で「養寿堂、越後加茂森田千庵」と読む。

蘭医森田千庵伝研究（片桐）

28、系図大概雑記 文政九丙戌年八月 千庵自筆、二五丁 一冊
改書写（一八二六） 20×14cm
29、人名録（東都京都） 自筆、十三丁、18×13cm 一冊
30、文政時変雑録 完 天保三壬辰年六月吉旦（一八三二） 一冊
内容は（文政十一戊子年春三月十三日より文政十三庚寅年十一月廿七日まで）
31、馬嶋流眼病聞書 十三丁 一冊
32、扇面 一枚
33、短冊 一枚

二、小柳家（小柳鉄次氏 新潟県加茂市）

1、和蘭控払都児繃帯図解 自筆稿本、六三丁、19×14cm 一冊
2、二十一剤 自筆稿本、二〇丁、20×14cm 一冊
3、巣守方則二十一剤 自筆稿本、一八丁、20×14cm 一冊
4、方剤 自筆稿本、八丁、18×13cm 一冊
5、瘍瘡秘方 自筆稿本、一四丁、26×18cm 一冊
6、質問之記 自筆稿本、三四丁、17×11cm 一冊
7、記聞（閑方茶話） 自筆稿本、三七丁、17×11cm 一冊
8、長崎聞見録 自筆稿本、四〇丁、16×12cm 一冊
9、痘疹家秘 自筆稿本、二〇丁、20×14cm 一冊
10、青囊秘録 自筆稿本、五一丁、17×12cm 一冊
11、紅毛金瘡仕掛膏薬集 自筆稿本、二三丁、25×17cm 一冊
12、雑記帳 自筆、三六丁、23×16cm 一冊
13、漫游雑紀行 自筆、一八丁 一冊
14、無題箋（雑記帳） 自筆、二七丁 一冊

Hosei University Repository

15、捷経方　自筆稿本、二四丁、横帳、10×20cm　一冊
16、活命集　自筆稿本、六〇丁　一冊
17、脈診　自筆稿本、二一丁、24×17cm　一冊
18、普山先生和蘭十六方　文政癸未（六）　自筆写本、九丁、24×17cm　一冊
19、疝脹抜萃　完　自筆写本、一五丁、25×18cm　一冊
20、玉川堂十六剤・方則二十一剤　自筆写本、一七丁、14×14cm　一冊
21、皇都玉川堂十六剤　文政三年　自筆写本、二九丁、17×12cm　一冊
22、西医選方　自熱至食不化　藤林普山先生訂輯門人長友義正吉校正自筆写本、七六丁17×12cm　一冊
23、神遺方・大同類聚方抜萃　自筆写本、五〇丁　19×14cm　一冊
24、大同類聚方不詳薬名　自筆写本、二三丁、横帳、15×20cm　一冊
25、大同類聚方　自筆写本、二〇丁、横帳、15×20cm　一冊
26、質験方聚覧　幽蘭堂質験録、江馬春齢・吉田蘭馨　自筆写本、一二二丁、20×14cm　一冊
27、傷寒論証治録　自筆写本、二六丁　一冊
28、食物本草抜萃　東垣季杲撰　季時珍訂　自筆写本、七五丁、17×12cm　一冊
29、宝玉製法（人造宝玉）　自筆、十五丁、18×14cm　一冊
30、参品製法　自筆、十三丁、17×12cm　一冊
31、蔵書目録記　専庵自筆、横帳、二八丁、うち十丁白紙、13×17cm「明治五壬申年六月虫干」とあり、医学之部一二五点、漢書之部四七点あり。　一冊
32、木製大看板（一粒丸 Hollandsch Remedie）78×24cm　一軸
33、印　十顆「千庵」「千庵一号巣守」「謙斎」「平徳盛印」「こしのかもやまよし氏」「山吉文庫」「養寿堂」「森田薬室」「山吉薬室」「越後国賀茂町森田氏」
34、高嶋秋帆之行書　桐箱入
35、森田千庵より父甫三宛尺牘　五通
36、父甫三より千庵宛尺牘　一通
37、千庵より戸塚静海宛尺牘　一通
38、千庵加茂より江戸への道中小使帳覚　一通
39、領内へ丸薬一粒丸売弘方願書　一通
40、藤井芳亭より千庵宛尺牘　一通
41、小村梡斎より千庵宛尺牘　二通
42、島津琢斎より千庵宛尺牘　二通
43、川本幸民より千庵宛尺牘　一通
44、川本幸民より森田正治宛尺牘　一通

三、山吉家（山吉卓爾氏 東京都足立区）

1、山吉家系図（写）　山吉頼奇氏自筆カ　十丁、19×14cm　一冊
2、漫游集覧　己卯（文政二年一八一九）　自筆稿本、五〇丁、17×12cm　一冊
3、見聞雑記　文政庚辰（三年一八二〇）　自筆稿本、一〇三丁、18×12cm　一冊
4、方則二十一剤　文政乙酉初夏（八年一八二五）　自筆稿本、十五丁、19×14cm　一冊
5、漫録　文政戊冬臘月（九年一八二六）　自筆稿本、一九丁、19×14cm　一冊
6、丸散方并製剤録　自筆稿本、十六丁、19×14cm　一冊
7、奇薬妙方漫録　安政四年（一八五七）　自筆稿本、十九丁、19×14cm　一冊
8、救急医法　自筆稿本、三六丁、20×14cm　一冊
9、千庵随筆　自筆稿本、六二丁、17×12cm　一冊

四、国立国会図書館支部静嘉堂文庫（東京都世田谷区）

1、跋太亜肸亜局方　金石・草木・用薬篇　自筆稿本　四冊

Hosei University Repository

2、天花辯　痘疮篇　麻疹篇　自筆稿本、六五丁、　一冊
3、八譜　器府巻一、四、五、象府八巻　自筆写本　六冊

〔注〕

(1) 呉秀三博士は大著「シーボルト先生其生涯及功業」大正一五年十月の中でシーボルト第一回渡来中の門人として簡単な伝を載せていられるが、千庵の京都・江戸遊学の項その他につき誤謬がみられ、資料の紹介もきわめて少ない。それは大橋永三郎氏の誤報によって繰められたもので、実際に資料を手にされての記述ではなかったがためである。その点沢弍氏の「北越蘭医の祖森田千庵」（医文学第一一巻第二号昭和一〇年二月）は実際資料を採訪されての記述であり信憑性の高いものであるが、稿本・写本の若干についての紹介に過ぎず、書翰の利用もわずかに一通くらいである。しかし、氏の採訪以後失われたものも二、三あるにより、やはり注目に値する。最近に至っては、蒲原宏氏の「尺牘からみた藤林普山と森田甫三・千庵父子」「尺牘からみた森田千庵と戸塚静海」（「医譚」復刊第一一号昭和三一・八、第二一号昭和三五・四）の二点があり、興味深く、かつ呉博士の誤りも指摘され、裨益される点多く、頗る注目すべきものであった。利用された資料は本論資料目録の一に依られた。しかし残念尺牘解読・発表に当って誤読と脱行・脱字がまま見受けられる。よって拙論ではこれらを訂正し加うるに資料目録の二、三、四を以て研究を進めた。

(2) 蒲原氏はこの尺牘を文政四年五月六日付とされているが、次の書翰から千庵の京都到着が文政四年四月八日であるから、これは当然文政三年五月六日付と看做すべきである。

(3) 藤林普山、天明元年（一七八一）正月十六日山城普賢寺村水取に生る。本姓大西氏、名紀元、字君諧、泰介（また助に作る）、淳道と称し、普山また筒城と号す。文化六年頃京都に出て開業し、海上随鷗に師事した。著訳書に「訳鍵」「和蘭語法解」「泰西度量考」「和蘭薬性弁」「西医方選」「遠西度量考」「離合源本」「西洋今日方」等あり。天保七年（一八三六）正月十四日五十六才を以て没す（山本四郎氏「海上随鷗とその一門（一）文化史学第一四号参照）。

(4) 文政二年（一八一九）刊。宇田川榛斎訳定、男榕庵編次。

(5) 正しくは、和蘭語法解。文化九年（一八一二）刊。藤林普山訳述。門人提碌桂樹の序によれば、「本二彼邦百乙爽氏及数家之斯普羅加公斯多一語典、此飜曰、引レ類挙レ例、且加二自得之説一、著二一書一、題曰二和蘭語法解一」といっているから、Scheikunde door ijpij (9 deelen) of Groot woordenboek door U Siegenboek hoogtelacerScheikundige Woordenboek van 13 feelen.

(6) 文化七年（一八一〇）二月刊。三冊。海上随鷗の「波留麻和解」（八万語三十部出版）が大部で且つ得がたいため三万語を選んで百部を印刷に付したものである。のち文政七年（一八二四）正月、随鷗門人の中沢権之介によって百部再版され、安政四年（一八五七）大野藩士広田寛憲によっ

Hosei University Repository

て「増補訳鍵」を出版した。中沢の言によれば「寔に約にして又尽せり。実に蘭社の重宝其右に出る者なし」という利用度の高い本であった。

(7) 穂亭主人輯「西洋学家訳述目録」嘉永五（一八五二）二五丁表に江馬蘭斎　大垣侍医　前野蘭化門　「五液診法　二」とある。

(8) 試験管

(9) 正しくは「西説内科撰用」寛政五年（一七九三）刊、十五冊宇田川玄随訳。原書はゴルテルの内科書すなわちJohannes de Gorter: Gezuiverde Geneeskonst, of kort onderuijs der Meeste Inwendige Ziekten, Amsterdam, 1774.

(10) ハルマは François Halma: Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen.（蘭仏辞書）を基にして出来た蘭日辞書のことで「波留麻和解」（江戸ハルマ・石井恒右衛門・海上随鷗、寛政八年（一七九六）と「道訳法留馬」（長崎ハルマ、H. doeff. 通詞達、天保四・一八三三）の二種あるも、千庵の学系からして「江戸ハルマ」であることは間違いない。なお江戸ハルマには江戸版（寛政八年）と京都版（文化二、三年頃）の二種あるが、勝俣銓吉郎博士の「『江戸ハルマ』に就て」（新旧時代第二年第二冊、大正一五年五月）には中井厚沢　大槻磐水門下　が増補開版した京都版「江戸ハルマ」十三巻のあることを紹介されているが、千庵の十二冊といっていることと冊数が近似していることからこの京都版「江戸ハルマ」を指していることになる。

(11) 海上随鷗が京都在住の間（文化六年頃）京都の武元登々庵のために訳述したもので、毎譜各八門に分って八八六十四より六十四冊に仕立るべく業を進めたが、本論中文政十二年六月朔日の藤林泰介より千庵に贈った書簡にも云う通り「先師海上老人何事も八つに定められ候へども是迄も其書成就不致内物故被致候」とあって全部完成しなかった。新撰詳学年表文化六年条に本書は五譜（形器篇気象篇目訣耳訣鼻訣）あって「他三譜不伝」とあるが、実際何冊あったかは今迄知られていなかった。この千庵の手記により三十巻ばかりあったことが知られる。内容は解剖書であるが、一切新字を作って独特の翻訳表現を試みたので読解不可能である。因に現存の八譜は板沢武雄博士所蔵随鷗自筆稿本と静嘉堂文庫および東北大学図書館の写本と都合三ケ所である。東北大のものは未見であるが、静嘉堂文庫のは旧大槻文庫本で、これについて如電翁は新撰洋学年表文化六年の条で、狩野享吉博士が北越賀茂山吉文庫払物から入手され、大槻如電博士がこれを譲り受けられた経緯が付記されているが、現物の写本六冊に当ってみると、これ正に千庵の自筆写本に相違なく、「山吉文庫」「JAUWDIU DAUW. TE IETYGOKAMO. MOLITASENNAN.」（円印）二顆を捺し、更に、森田家々伝の丸薬「一粒丸」に千庵がバタビア局方その他より苦心改良の上製造した「HOLLANDSCH REMEDIE. 一粒丸」なる丸薬の薬袋を表紙に仕立て利用していることからも歴然たるものである。なお、かつて「八譜目訣写本」もあったことが「蔵書目録記」（明治五年改）

Hosei University Repository

で知るのであるが、現在その行方はわからない。

(12) 大槻玄沢「六物新志」天明元年、一七八一、下巻十五丁目表。

(13) 蘭学資料研究会「江戸幕府旧蔵洋書目録」昭三二年。八九頁。

(14) 大森実・向井晃・安岡昭男・片桐一男編「輸入蘭書目録稿」(蘭学資料研究会研究報告第七五号・一九六〇年一二月)五七頁。

(15) 同、七一頁。

(16) 本年夏(一九六一・七・二八)に採訪した。

(17) 宗田一氏「宇田川榛斎(玄真)訳『和蘭局方』について」(医譚・復刊第一一号、昭和三一年八月)。

(18) 宗田氏前掲論文。

(19) 清水藤太郎博士著「薬物需給史」(日本学士院「明治前日本薬物学史」昭和三二年所収)四六七頁「薬局方」の項参照。因に筆写の偶目したものは、第一五回日本医学会総会(一九五九・四)の際「資料でみる、近代日本医学のあけぼの」展が三月二八日〜四月七日まで銀座松坂屋で行われそこで一八〇七年版をみたこと、本年七月八日市立横浜大学医学部で開催された蘭学資料研究会第三回大会で清水藤太郎博士御所蔵一八五二年版をみたことの二回である。

(20) 新撰洋学年表によれば、天保四年(一八三三)二年二九日歿。「諳厄利亜人性情志」文政八(一八二五)訳あり。千庵随筆中に蘭学高名家の一人に挙げている。

(21) 千庵の「人名録」には「医師藤井芳亭先生巣鴨加賀様御中屋舗」とある。宇田川玄真の門下で、文化五年(一八〇八)加賀前田候が宇田川玄真に治療を頼み、翌年玄真の薦めで吉田長叔と共に加賀藩侍医となった。伊勢人で名を俊。

(22) 亀田鵬斎。

(23) 「人名録」には「医師渋川道達、小川町柳原遠江守様御内」とあり「男甫仙、本所五ツ目榊原様下屋敷ニテ」と加筆している。

(24) Heister, Laurens : Heelkundige onder-wijzingen. Amsterdam, 1776. で、千庵はこのうち何編を訳したのだろうか。因にこのヘイステルの外科書は杉田玄白が一部を訳述し、更に大槻玄沢これを継承し「瘍医新書」として文政八年(一八二五)に誘導編四冊を刊行した。この外佐々木仲沢・大槻玄幹・越村徳基等が一部分ずつを訳しているが、森田千庵の訳もこれらと相前後しているわけである

(25) 杉靖三郎博士編『杉田玄白全集』第一巻(昭和十九年刊)所収の鶴斎日録天明七年(一七八七)正月より文化二年(一八〇五)三月迄による。

(26) 文政七(一八二〇)に死去した小森玄良の実子義真出羽介のことを指す。玄良の歿年は天保十四年三月二三日(六十二才)であるから「親小森も相果候との取沙汰云々」は事実ではなかったことになる。

(27) 沢式氏「北越蘭医の祖森田千庵」医文学第一一巻第二号(昭一〇・二)千庵の伝記は誤謬をそのまま踏襲しているがそのとき在ったもので今日行方不明のものも若干ある。

Hosei University Repository

日独文化協会「シーボルト資料展覧会出品目録」昭十。

(28) 普山は文政元年に依百乙・イペイ A. Ijpeij: Handboek der Materies Medica. 1811. を訳して起稿しているから、この「和蘭薬性弁」を贈ったのであろう。因に「この原書はイペイがバタビヤ薬局方に基き、薬物学のハンドブックとして註解を加えた書であって、青地林宗も「依百乙薬性論」として邦訳している。

(29) Kaempfer, Engelbert: De beschrijving Japan; behelsende een verhaal van den ouden en tegenwoordigen staat en regeering van dat rijk. 's Gravenhage, 1729.

(30) 宇田川玄真訳・同榕菴校補「遠西医方名物考」(文政五年序)。

(31) Buijs, J.: Natuurkundig Schoolboek. 1828. ボイスの物理学書、教師と生徒の問答体の初歩の教科書。「格致問答」の名でわが国で覆刻されており、写本も少くない。青地林宗・川本幸民・橋本宗吉等が邦訳している。

(32) 青地林宗。

(33) Lavoisier, Antoine Laurent (1743-94) 仏。のことと思われる。いうまでもなく近代化学の父と呼ばれ、新燃焼理論と元素概念を確立して、近代化学史上にさんと輝く、化学革命をなしとげた人。一七八九年(寛政元)に出版された Traité Elémentaire de Chimie「化学要論」は、近代化学の基礎を系統的に述べたもので、元素概念の明確な規定と化学史上最も注目すべき科学的元素表をその中に見るのであって、すべて三三種の元素を四類に分けたのであったが、この本を指しているのであろうか。とすれば和蘭人と四十八元というのは間違いである。(湯浅光朝著、解説科学文化史年表、一九五〇年、第六一～六二頁参照)

(34) 当時京都には藤林普山(天明元―天保七 一七八一―一八三六)の他に、小森桃塢(天明二―天保十四 一七八二―一八四三)、小石元瑞(天明四―嘉永二 一八四九)、新宮凉庭(天明七―嘉永七 一七八七―一八五四)、野呂天然(明和元―天保五 一七六四―一八三四)などがいる。

(35) 宇田川玄真(榕菴)津山藩侍医、天保五年(一八三四)十二月四日卒。享年六十六。千庵の江戸遊学時代の師匠。

(36) 小村英庵名は馨、号梡斎、明和三年(一七六六)生れ、天保八年六月八日(一八三七)歿。七一才。長岡市善行寺(浄土真宗)内小村家塋域に葬る。釈名広周。江沢養樹の義弟にして、宇田川塾で舎密学を攻究し、「後越薬泉」一冊、(文政十三庚寅冬霜月九日)を著している。(越佐叢書第五巻所収)。戊辰の兵火により英庵関係資料の失われた現在、本史料を得たことは嬉しい。

(37) 大槻如電「新撰洋学年表」の天保六年(一八三五)の頃。及び蒲原宏氏「越後の蘭方医島津圭斎・琢斎の伝」(日本医事新報一六七六号、昭三一・六・九)に詳しい。

(附) 資料の長期貸出を許された小柳鉄次・山吉卓爾両氏に、自由な閲読を許された蒲原宏氏には共に深甚なる謝意を表すものである。

(一九六一・八・二一)